リサーチフォーラム in Osaka, Japan
2016.7.30 記録

2016 年度 美術科教育学会 リサーチフォーラム

in Osaka, Japan 記録

2016 年 7 月 30 日(土) 13:00-18:00
於：大阪教育大学天王寺キャンパス 西館ホール
参加者：65 名

宇田秀士(奈良教育大学)：それでは時間になりましので，「美術科教育学会リサーチフォーラム in Osaka, Japan」を始めていきたいと思います。皆さん，こんにちは。よろしくお願いいたします。では最初に学会を代表して，前代表理事，和歌山大学教授の永守基樹先生にご挨拶をいただきます。

永守基樹(和歌山大学)：皆さん，こんにちは。暑い中をよくお越しくださいました。美術科教育学会は，1979 年に設立されました。90 年代中頃からでしょうか「出前シンポジウム」という名称で，各地で現場と学会の結びつきを深めてきました。

「リサーチフォーラム」は，その発展形態です。その時々の美術教育の重要なトピックスに焦点を当て，学会内外の知見を出し合おうという会です。今回も皆さまのご意見を寄せて頂き，日本とドイツの美術教育の課題，とくにウアラス先生がご提示になっていらっしゃる「造形遊び」とも響き合うオブジェと空間の教育，あるいはどこかヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys 1921-1986)を思い起こさせる総合的なプロジェクト学習などに関する知見を結集できればと思っております。

ウアラス先生はハイデルベルクからお越しになりました。ハイデルベルクと聞きますと，ドイツロマン主義の象徴的な都市というイメージを浮かべてしまいますが，皆さんはいかがでしょうか。近年の教育界であらためて評価されているハンナ・アーレント（Hannah Arendt 1906-1975）はハイデッカー(Martin Heidegger 1989-1976)の弟子になった後，ハイデルベルク大学に移って，ヤスパース(Karl Theodor Jaspers 1883-1969)のもとで学んだとか。マックス・ヴェーバー(Max Weber，1864-1920)も，ハイデルベルクに深い縁があった人ですが，若い頃のヤスパースとも交流があったそうです。アーレント，ヤスパース，ヴェーバーという，美術教育を研究するためには欠かせない思想家たちの背後には，ハイデルベルクという都市があるのだな，というふうに，近頃あらためて思った記憶があります。

ウアラス先生には，そのハイデルベルクからお越し頂きました。美術教育の研究をしておりますと，どうしてもアメリカ，イギリスというアングロサクソン系の研究を参照することが多いのですが，本日はドイツと交流を深めて，別の方向から美術教育のビジョンをこの場でつくっていければ，と思っています。どうかよろしくお願いいたします。（拍手）

宇田：永守先生，ありがとうございました。そうしましたら，始めていきたいと思うのですけれども，今日は全体で登壇者を含めましても 40 名から 50 名というコンパクトな会になりました(実際には，全体で 65 名の参加があった)。

夏の研修シーズンということで，いろいろな所でこういう催しものをしています。参加数としましては，それほど多くないのですけれども，全国から会に来ていただいています。それから，いつも私がやっている会では，小・中・高等学校の先生方が中心なのですけれども，本日は市役所，公的な機関にお勤めの方，あるいはもっと広い視野で文化を研究しておられる方，いろいろ来られています。かえって楽しみでございます。どうぞよろしくお願いいたします。

■13：05–13：25　事前発表
＜企画の趣旨，登壇者紹介，進行＞

宇田：それでは，会の趣旨，登壇者紹介，それからこれまでの経緯を伝えていきたいと思います。私，奈良教育大学の美術教育を担当しております宇田といいます。よろしくお願いいたします。

(上映スライドを指し示しながら)これには，ページ数が出ておりますのが，配布冊子[①]の頁数と対応しています。登壇者の皆さん，いまスライドが見にくいのですけれども，後で席を移動していただきますので，ご安心ください。スライドにある６ページというのが配布冊子の６頁であるということになります。

では，始めます。趣旨といたしましては，現在，子どもたちの新しいカリキュラム(学習指導要領)というのが文科省関連審議会で審議されているということです。これは 10 年に１度改訂をされるということですが，今まさにそのときなのです。けれども，現在話題となっているのが「小学校でも英語の活動が拡大して入る」「道徳を教科化する」などということです。これらは注目が集まりやすいのですけれども，芸術活動というのはあまり大きく取り上げられないという現状があります。しかし，とてもこれも大事な内容ですから，ぜひ教育課程にも取り入れ，それから一般の方にもアピールしていくべきかなと思います。

普段，私は小・中・高等学校あるいは幼稚園の現場の活動を地道に積み上げる形の，非常に地味な研究活動をしているのですけれども，こういう教育課程の改訂というときには，新たな道を探るということも必要であります。そういう意味でドイツからお招きしたここにおられるマリオ・ウアラス氏のアート・プロジェクトというのは，一つの光といいますか，鍵・きっかけを, 与えてくれのではないかなと思います。そして，日本なりの新しい何かアイデアがそこから生まれれば，というように考えております。これがこのフォーラム開催の趣旨でございます。

続きまして, マリオ･ウアラス先生をご紹介します。本日のお題は，「ドイツの初等教育におけるアート・プロジェクト教育実践の可能性について」ということで，お話しをいただきたいと思います。

マリオ・ウアラス先生は，ドイツ南西部のハイデルベルグ教育大学で芸術教育と芸術活動の教授の両方をされていますので，現代アートやペインターとしての側面もお持ちです。配布冊子の 28 頁(本記録集 35 頁)からになります。よろしくお願いします。

ウアラス：よろしくお願いします。（拍手）

宇田：軽く紹介しました。いまご紹介しましたように，2008 年の InSEA で 1 回来ていただいていますので，そのときの内容ですね。では，ちょっと電気を暗くしましょうか。(スライドを示しながら)あのような描画の製作活動，魅力的なものがあると思うのですけれども，ホームページに載っています。これがマリオ・ウアラス先生です。

今日は新しいスライドを用意していただきまして，冊子の 29 頁(本記録集 36 頁)の次からスライドの頁 1 から 11(スライド 62 枚)というのがありまして，これは，これからご紹介します通訳の松坂さんのほうで和訳していただいていますので，それとマリオ・ウアラスさんのドイツ語の上映スライドをあわせて見ていただけたらと思います。よろしくお願いいたします。「工事現場」という新しいプロジェクトです。

では，もう一人ご紹介するということで，松坂さん，ちょっとお立ちいただいて。本日，ドイツ語通訳全般をお願いする松坂千也子さんです。よろしくお願いいたします。（拍手）

続きまして，その横ですね，指定質問者，岡田陽子先生です。よろしくお願いいたします。（拍手）

この３月まで小学校の校長先生をされていたということでのいろいろな経験・思いもありますので，日本とドイツの教育現場をつなぐという意味でご質問をしていただきます。30 頁(本記録集 37 頁)にその内容，現在勤務の大学名も書いてありますので，見ていただいたらと思います。

それから次，辻大地さんです。よろしくお願いします。（拍手）

辻さんは，「こどもアートスタジオ副代表」ということで，いわゆる放課後の子どもたちの活動を支える活動をされていて，そういう知見からいろいろ質問を

①奈良教育大学美術科教育研究室編『2016 年度 美術科教育学会リサーチフォーラム in Osaka,Japan 概要集』2016,全 55p.

していただこうと思います。31 頁(本記録集 38 頁)です，よろしくお願いいたします。

はい，続きまして，福本謹一先生です。（拍手）兵庫教育大学の現在は副学長ですけれども，美術科教育も担当されています。先生のほうは，プロジェクト学習，いわゆる PBL(Project-basedLearning/ Problem-based Learning)における美術分野の可能性からということです。これ大まかに言ってしまいますと，いわゆる総合的な学習など，もう少し大きな学びというところから捉えたときに，アートの分野がどんなことができるのだろうかということでお話しをしていただき，そして質問をしていただこうと思っています。32 頁(本記録集 39 頁)です。よろしくお願いいたします。

続きまして，湯川雅紀さんです。よろしくお願いいたします。（拍手）

湯川さんは，いま関西福祉科学大学にお勤めなのですけれども，長らくと言いますか 19 年間ドイツで学んだり，それから作家活動をされたり，そして子育てをされたということで，現地で生活をした感覚を踏まえて，お話ししていただこうと思います。どうぞよろしくお願いいたします。美術教育と絵画制作の両方をされております。

その次，お隣，神戸大学の鈴木幹雄先生です。よろしくお願いいたします。（拍手）

先生はご存じのように，長年，ドイツ改革派芸術学校，例えばバウハウスなどの研究そしてそこにおける芸術教育学の研究の立場，そのようなことを長年続けておられます。その立場からウアラスさんにご質問をしていただこうと思います。38 頁(本記録集 45 頁)に質問の趣旨，それからその前提となる発表内容が書いてあります。

それから，今回，20 頁から 27 頁(本記録集 20-34 頁)を開いていただきますと，ドイツの教育制度というものがそこに書いてあります。これは鈴木先生が 2003 年にまとめられた内容[②]であります。外国の教育と日本とを比較をするときに，どうしても文化的な土壌が違うものですからわかりにくいのですけれども，ざっと冊子を見ていただきましたら，いろいろなものが見えてくるのかなと思います。日本で小学校といわれているものは基礎学校(grundschule)となるのですけれども，小学校 1 年から 4 年までがいわゆる初等教育ということで，そこを踏まえていただきながらマリオさんの発表を聞いていただいたらと思います。

最後，大阪教育大学の佐藤賢司先生にお願いしていたところなのですが，本日，大阪教育大学柏原キャンパス，こことは別のキャンパスで，オープンキャンパスをやっているということです。また，それに関する会議があるということで，少し遅れるということです。おそらく最後にぎりぎり間に合うかどうかということなものですから，「つくることと身体の思考」という題での発表は省き，質問だけしていただこうと思います。佐藤先生は美術教育研究者，それから工芸作家としての立場もお持ちですから，その立場からお話しをしていただこうと思っております。

ウアラス氏が企画・実践した<ロフト・プロジェクト>と日本の「造形遊び」との比較 −2008 InSEA in Osakaでの討議をふまえて

宇田：これでご紹介が終わったわけです。次に，ここに至る経緯なのですが，2008 年にそこに座っておられる福本先生の主導のもとに，第 32 回 InSEA 国際美術教育学会というのを大阪で行いました。それが今回の交流のきっかけであります。8 年前になるのですけれども，このスライドのように大変大勢の方が来ていただいたということで，そのときにも美術科教育学会が共催をしたということでありました。

その折に，私と当時，首都大学東京の長田謙一先生，そしてウアラス先生とともに，大阪国際交流センターでシンポジウムを行ったのですけれども，それが今回のベースになっているということであります。

当時はこのスライドのような同時通訳の機械・ブースもありました。英語ではありましたけれども，瞬時

2008InSEAinOsaka の様子を説明する宇田

②国立教育政策研究所『図画工作・美術のカリキュラムの改善に関する研究−諸外国の動向』2003,pp.49-62.
http://www.nier.go.jp/kiso/seika2/zuko.pdf　2016.7.1 確認

に日本語がヘッドフォンを通じて聞こえてくるので速かったのですが，きょうは逐語訳ということで，少し時間がかかるということが，違いであります。

このスライドは，その折にマリオさんが発表された「ロフト・プロジェクト」です。きょうは新しいネタ・題材を持って来ていただいていますので，簡単にご紹介して本番を迎えたいと思います。当時のスライドです。

ロフトでの活動ということで，様々なものとの出会いということがテーマとなっておりまして，実際の古い建物の中のロフトを使ったプロジェクトでした。その中には，こういう落がきのようなものも含めていろいろな蓄えられた情報があって，ということなのです。この場所の設定も，マリオ・ウアラスさんらしいなと思うのは，実は，ドイツが東西ドイツ分かれておりましたときの，もともと旧東ドイツの政党の建物であったということです。

もう少し言いますと，マリオさんは，旧の東ドイツのご出身でございまして 23 歳位で初めて東西ドイツが統一ということで 1989 年から 1990 年辺りです。そういうようなご自身の思いもあったのではないか，と思います。そういう歴史的な場所でのプロジェクトということでありました。

その中で，いろいろ活動をするのですが，これが絵の具で描いたりするわけではなくて，ロフトにあるチリだとかゴミだとか，あるいは炭のようなもので描いていく。これはドイツの芸術活動の中によく出てくるわけなのですけれども，それがここにもあるということでした。

そして，こういうようなドローイングを行う。そして，それをコレクションにしてみたり，それから，残された材料からもう一回作ってみたり，古いアンテナで幽霊をつくってみたりと，というようなことをされました。そのような活動を紹介していただいたということです。物，それが新しい物じゃない，古い物ですね，そういう物を使ってということになります。「ゴミ工場」というようなものも子どもらが名づけてつくっているわけであります。

これは今日の発表にも出てきますが，小学校1年生から4年生位までの子どもたちでの実践なのですけれども，ウアラスさんの実践の中には必ずこういうような鑑賞の内容が出てきまして，ヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys 独 1921-1986）の『野兎のお墓 1962-1967』(Hasengrab, 1962-67 Hare's Grave) ③という作品なども紹介されています。

そのように子どもたちが行った内容というのが，美術の歴史につながり，「ドイツのヨーゼフ・ボイスもこのように皆さんと同じようなことをしているのですね」と言えるわけです。美術の歴史と子どもの活動とつなぐ役割をして，小学生でありますけれども，積極的に鑑賞を取り入れている。特に活動の途中で取り入れることが，マリオさんの実践の特色だろうなというように思っています。

それから，これは子どもらのそれぞれの活動の紹介ということで，このようなドローイングあるいはコラージュができるということであります。それから過去のものの陳列ということで，いわゆる美術館のもともとの原形ですね，何かものを集めてコレクションをしてある，見せるというような内容をされていて，これは陳列ケースですね，こんなものもあります。

このスライドは皆さんにご紹介しましたウアラスさんのホームページ④で公開されていますので，後ほどゆっくりダウンロードしていただいたらと思います。

このようなマジックハウスをつくる子が出てきたりもするということであります。いろいろな材料をミックスさせてつくっています。

そして，この場所で行ったという特別なことを感じ取った子どもたちの活動なのですが，こういう境目，ボーダーをつくる子どもたちがあらわれたと，境目ですね，つくったと。東と西ということだと思うのですけれども，東と西でお互いに向かい合うという統一というようなことを意識したような活動も展開されたということでありました。

そして，それをただやるだけではなくて，省察(リフレクション)して書き残すというようなこともされてきたし，それから展示もされたということでありました。

駆け足でやってまいりましたけれども，2008 年のときには，これと日本の「造形遊び」という活動を比較するような形で行いました。当たり前ですけれども，

---

③ドイツ・ミュンヘン・レンバッハハウス美術館 HP
http://www.lenbachhaus.de/footer/presse/d7472d5ef93890c270e635a2/joseph-beuys/
2016.8.1 確認

④以下のURLを参照　2016.7.1確認。

https://www.ph-heidelberg.de/kunst/personen/hauptamtlich-lehrende/biographie-prof-mario-urlass/urlass-downloads.html

ロフト・プロジェクトは，<Dachbodenprojekt (als pdf)>

ウアラスさんのプロジェクトと私たちが普段目にしている「造形遊び」は少し違う所もあるし，それから共通の所もあるというのを確認した次第であります。

ここに書いてあるような内容は，全てこの冊子に採録しましたので，後々，見ていただいたらと思っております。表現活動において個人の立場を大事にするというのは，ウアラスさんのプロジェクトと私たち日本の「造形遊び」は一緒なのですけれども，やはり日本の場合は教科学習の色彩が強いというような所はやはり違うなということでお感じになられました。

ウアラスさんが，提案されるのは教科横断的カリキュラムというようなこと，あるいは学際的な学習ということですから，日本でいったら，どちらかといえば総合的な学習あるいは特別活動的な発想なんかも入れながら学習を展開するということが特徴的かなと思っています。

それから先ほど触れたように，小学校１年でもいろいろな作家たちの活動を紹介する鑑賞を入れるということも特徴的でありました。これは８年前です。

(ドイツの国内地図を示しながら)こちらがハイデルベルク(Heidelberg)で，湯川先生が学ばれたのはデュッセルドルフ(Düsseldorf)の有名な美術アカデミーです。そしてマリオさんが生まれたのはツヴィッカウ(Zwckau)で，いま統一されておりますが，かつては東ドイツでした。

長田先生がいろいろな総括をしていただいた訳なのですけれども，日本の場合，決定的に欠けている発想という所は，ドイツにおいて常に芸術とは何だろうかと問い直すことがよくされている。一方，日本の場合は形のみを上手に取り入れるということがある。本質的なことを常に問うところがドイツであり，形のみの日本との違いがありはしかなということでした。それから，やはり実践に鑑賞活動を取り入れているので，いろいろな芸術家の息吹が子どもらの活動にも感じられることなどもまとめられておりました。

そして，日本では「造形遊び」というのは「明るく伸び伸び」という印象が強いのですけれども，ドイツの場合には伸び伸びするところもあるけれども，いろいろ深い悲しみや暗闇というようなところも対象にしているという所が違いではないかと指摘されました。そして，長田先生がご指摘されたのは，日本の子どもたちも当然暗い部分や悩む所もあるので，そこをどう入れていくのかが課題かなということでした。その違いを見ておりますけれども，中央集権的な日本と連邦国家であるドイツ，州ごとに違うというシステムもあろうかなと思います。

会場との対話もこのように行ったわけなのですけれども，この会場に，ここにおられる鈴木先生もいらっしゃるし，それから柴田和豊先生(東京学芸大学名誉教授)，長谷川哲哉先生(和歌山大学名誉教授)もおられるということです。それから，前の文科省教科調査官の奥村高明先生も参加されていました。

前回は日本の「造形遊び」との比較ということで，ウアラスさんのプロジェクトにみられる子ども主体の学び・表現に焦点をあてたのですが，今回はアート・プロジェクトという学び，日本で言ったら総合的な学習の中でのアート分野に焦点をあてます。ドイツの総合学習は事実教授(Sachunterricht)と言われるのですけれども，それとの関連も含めて見ていきたいというふうに思っております。

そうしましたら，少しでも時間が惜しいということで，このあたりにしておきまして，では，これからマリオ・ウアラス先生の講演に移っていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

■13：25–14：35 講演
ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」の可能性について

講演は，マリオ・ウアラス氏のドイツ語による発表が先ずあり，それを松坂千也子氏がドイツ語から日本語に訳して参会者に伝えた。以下のウアラス氏の発表内容は，松坂氏が通訳したものである。なお，通訳は，ウアラス氏の内容のまとまりにそって短く区切って行われた。

マリオ・ウアラス(ハイデルベルク教育大学)：皆さん，こんにちは。本日は皆さんにお話しする機会を設けていただきありがとうございます。特に，宇田秀士先生にはフォーラム開催のためのご尽力をとっていただき，また福本先生には私を招待いただきましたことに深く感謝申し上げます。

<スライド１　アート・プロジェクト「工事現場」BAUSTELLE. KUNSTUNTERRICHT>

では，早速始めさせていただきます。まず本講演のタイトルになっているこの１枚目の「工事現場」のスライドですが，これは私が大学以外に授業を行っている小学校です。ここが今回のプロジェクトの舞台です。

スライド１

この講演では, 小学校の芸術教育におけるプロセス, メソッド及び方略の潜在的な可能性を問い直したいと思っています。講演の内容は，私個人の関心や認識, 実践研究に基づいています。ここでは，子どもたちとのアート・プロジェクトの実践とその人間形成プロセスへの重要性に焦点を当てたいと思います。皆さんにお見せしたいと考えているのは，教え学ぶかたちをさまざまに変化させながら絶えず何かが発生し実験するという開かれた形の芸術教育です。

<スライド２芸術的思考と行為 Elemente künstlerischen Denkens und Handelns>

ドイツでは，芸術教育の理論及び実践の方向性を模索する中で，独自性と自己構築能力を持つ主体を中心に据えた芸術志向の教授法が確立しました。私を長年駆り立ててきたものも，小学校における芸術教育の理念が持つ潜在力，可能性そしてその限界を探ることでした。

私が重視しているのは，「子どもたちの直接的な知覚認識(感性の鋭敏化 achtsame Wahrnehmung)」「批判的なリフレクション・振り返り・反省・検証 kritische Reflexion」「想像力 Imagination」「文脈性 Kontextualität」「変容 Transformation」といったものです。これらを「芸術的思考と行為」の重要な要素とする実践プロジェクトです。

<スライド 3 アート・プロジェクトとは揺れ動くこと Künstlerische Projekte pendeln>

私は，個人や事物を全体として捉えようする芸術教育が望ましいと考えています。人間には可塑性があります。芸術的実践プロセスでは，思考と行為を極端から極端へと行ったり来たりさせる，つまり様々な可能性の間を揺れ動くことが肝要です。では，どういうものの間を揺れ動くのかということを掻い摘んで申し上げます。

アート・プロジェクトは，まず「誘導された学習と自己責任の学習 zwischen initiiertem und selbst verantwortetem Lernen」の間を，そしてまた「開放的であることと統制 zwischen Öffnung und Steuerung」の間を，「真実と想像 zwischen Wirklichkeit und Imagination」の間を揺れ動きます。このうち「真実と想像」というのは，アート・プロジェクトにとっては非常に大事なものであります。そしてまた，アート・プロジェクトは「緩やかな思考と厳格な思考 zwischen lockerem und strengem Denken」の間を，「専門的な要請と人的要請 zwischen fachlichen und personalen Ansprüchen」の間を揺れ動きます。ただしここで，ちょっと文句を申し上げれば，この「人的要請」というのは, 現実にはなかなか満たされることがありません。

<スライド４ アート・プロジェクトの基本的な特徴 Merkmale künstlerischer Projekte>

では，「アート・プロジェクトの基本的な特徴」は何でしょうか。まず，「長期間にわたり継続的に少しずつ発展していくテーマ ein sukzessive sich entwickelndes Thema über einen langen Zeitraum」です。私のプロジェクトは，多くは数カ月にわたるのです。ときには丸々1 年かかるというものもあります。

次に，「プロセス重視，実践重視の受容，制作，そし省察 prozess- und werkorientierte Rezeption, Produktion und Reflexion」。三つ目が「遊戯的，実験的な学習状況 spielerisch-experimentelle Lernsituationen」，そして「領域横断性を内包 immanente Interdisziplinarität」していること。そして，それこそがまさにこのアート・プロジェクトの根幹を成す考え，理念であります。

さらに「多様な見方と全体性，包摂性(これはテーマや子ども，個人に対して)Multiperspektivität und Ganzheitlichkeit (bezogen auf Thema und Kind)」であります。よくペスタロッチ(Johann Heinrich Pestalozzi スイス 1746-1827)が言ったように，学習が心とそして頭の両方で行われるということを念頭に置きます。

そして最後に「媒体の多様性，これはプロジェクトの実現形態の多様性 Multimedialität (als Vielfalt formaler Lösungen)」として書かれています。具体的には写真であったり，それからインスタレーションに

なったりという多様な表現方法があります。

では，我が州，バーデン・ヴュルッテンベルク(Baden-Wuerttemberg)州の芸術教科に関する最新の教育計画では，芸術教科にはどのような形成可能性があるかが特に明確になっていることを申し上げます。来年度から実施されるこの教育計画，つまり 2016 年秋から始まるわけですが，その導入部を少し引用したいと思います。

> 子どもたちの世界の体験の仕方，表現，解釈の仕方は実に多様で想像力豊かである。芸術教科は子どもたちの創造性と美に対する感受性を一体として伸ばすものである。それは生徒たちが感じ，行動することを通じて，自分自身と世界についての認識を獲得できるように，自分を位置づけ，自らの能力を伸ばせるようにするものである。

つまり，芸術教科の眼目は自己認識，世界認識の獲得なのです。では，子どもたちが自身と世界を中心に据えられるような学習状況をつくるにはどうしたらいいのでしょう。例をあげてお話ししたいと思います。

世界には工事現場が至るところにあります。そして，拝見したところ日本でもそのとおりです。私たちが実際の生活世界とその本来の規定を保持できるように，あらゆる場所で工事が行われているのです。そして，教育制度そのものも比喩的には一種の工事現場といえるでしょう。学校は常に改革途上にあります。その意味では芸術の授業もまた永遠に続く工事現場なのです。教授プロセス，学習プロセスの中にある予測不可能な成長，絶えず変化する生活世界，そして日常へ分野横断的な学問へグローバル社会へと常に拡大する芸術という概念が，不断に再構築し，変化することを求めるからです。

「工事現場」はまた同時に，子どもたちの生活世界から導かれたテーマでもあります。それは学習者を研究，発展，自らの思考空間の拡張，探索，問いかけ，確認することへと触発する可能性を秘めています。工事現場は好奇心と驚きを挑発するのです。

<スライド５「工事現場」プロジェクト Das Baustellenprojekt>

ここでは，私が大学で教えるかたわら，私が子どもたちと今まさに実施中のプロジェクトをご紹介したいと思います。「今年５月にスタート Beginn: Mai 2016 →」したこの授業は，構造化されたプロジェクトで，この夏休み以降に個人ベースの展開が始まります。昨年９月から毎週月曜日の午後，ハイデルベルク近郊のヴィースロッホのメリアン基礎学校１a 学級(Klasse 1a,Merianschule Wiesloch)で，22 人からなる１クラスに，90 分の授業をしてきました。その眼目は芸術教育の教授理論を学校での現実の授業における実現に結びつけることであります。

それは残念ながら近年亡くなったドイツの著名な芸術教育学者であるヘルガ・カムプ・ヤンゼン(Helga Kämpf-Jansen 独 1939-2011)が言ったように，ミッシングリンク（Missing-link 失われた環/鎖）を解消することです。ヤンゼンさんは，2007 年に行われた InSEA 国際美術教育学会ヨーロッパ地区会会議でハイデルベルクにお越しになりました。ヤンゼンの言葉を引用させていただきます。

> 確立された理論と現実における実施との間に乖離があることはあまりに広く知られた現象だが，私はこれを芸術教育学のミッシングリンクと表現したい。ミッシングリンクはまた空白，ブランクとも表現でき，芸術教育の現実はその理論への連続性を失っていること，あるいは理論が現実の授業への連続性を喪失していることを意味している。この空白こそ，私は今日の芸術教育の議論が抱える最大の問題と考える。

そして，その問題は私のいるドイツだけではなくこの日本でも同じように意識されていると思います

<スライド６ スタート時の状況 Ausgangssituation>

では，具体的なプロジェクトの内容に入っていきたいと思います。

スライド６

子どもたちは工事現場をやかましいとか危険だなどといって嫌がりません。むしろ大いに興味をかきたてられています。工事の様子を感嘆し好奇心をかきたてられ，驚きつつ見ています。様々な機械やそこで働く人たち，地面からだんだん大きく形をなしていくものを感心して見ているのです。

この学校では，美術教室のすぐ隣に新しいカフェテ

リアをつくることになったので工事が始まりました。子どもたちは窓際に押し寄せてすずなりになって見ています。ごらんになられるとおりです。この工事現場への子どもたちの興味がこのプロジェクトを着工する私にとっての引き金になりました。

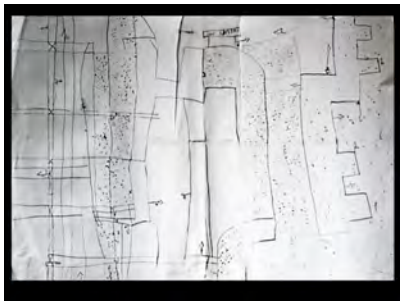
では，このプロジェクトの経過を順に写真を追って説明していきます。あまり時間がありませんので，写真をそのまま流すこともあります。

＜スライド 7 設計図を想像し，描く
Imaginierte Baupläne zeichnen＞

工事には設計図が必要となります。私は子どもたちが設計図にどんなイメージを持っているのかに興味がありました。子どもたちには設計図とはどんなものか描きなさいと指示しました。ここで彼らの想像力が発揮されます。

生半可な知識を描いたものや想像力豊かな絵が実に多様な形で絵かがれました。

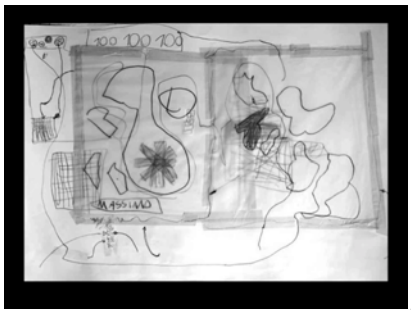
スライド7


スライド8

スライド9

そしてこれからその子どもたちが描いたいろいろな設計図をごらんいただきます。そして私はそのとき大判の紙を子どもたちに配り，２人，３人で組みになって書くようにします。これがその作品です。

これがほとんどプロの描いた設計図に近いものでありました(スライド８)。これもまたパワフルな設計図です(スライド９)。そして，この作品は生徒が一人で描いたものでした(スライド 10)。


スライド 10

スライド 11

＜スライド 12 専門家の登場 1 Bauexpertel＞

そして, 子どもたちが自分たちで設計図を描いた後, 私は工事現場の人にお願いして教室に入ってもらいました。その人は，本物の設計図を見せてくれ，実際の工事では何がどのように設計図に沿ってつくられるのかを説明してくれました。

スライド 12

このような試みは，授業の進行に従い，また工事の進行に従って突然浮かんでくるものでありました。

<スライド 13 仕事と遊び Arbeit und Spiel>
そして子どもたちはトラックやショベルカー，クレーン車など建築機械や車両のおもちゃをたくさん持っています。次の授業ではそれらを学校へ持ってきてよいことにしました。それらを使って遊び，教室の床に工事現場を作りました。

スライド 13

その間も外では現実の工事が進んでいます。このときの写真を幾つかごらんください。左側が現実の大人の建築の仕事で，右側が教室での遊びです。この右側の写真のガラスの向こうに工事現場が写っていて，一生懸命大人の人たちが働いているわけですが子どもたちはこのガラスの内側で遊んでいるわけです。

スライド 14

スライド 15

私は接着テープを持ってきて，子どもたちはそれを利用して床の上に道路をそれで再現し，そこに自分たちのおもちゃを配して工事現場を再現するということをしました(スライド 14)。そしてだんだん彼らが考える工事現場ができ上がっていきます。子どもたちが使ったのは，自分たちが持ってきたおもちゃだけではなく，学校の備品もあります。特に，算数なんかで用いられるもので，いま使っていないというものも動員していいことになりました(スライド 16-18)。

スライド 16

スライド 17

スライド 18

そしてごらんのように，大変大規模な工事現場を子どもたちはつくりました。そしてこれが重要なステップなのですが，制作したことのリフレクション(省察)をする, それを大事なステップとして入れております。

私の授業は 90 分ですから，90 分たったら，この大規模な工事現場は全て撤去されなければなりません。これは 90 分間の遊びというよりはむしろ工事現場というものの文脈を子どもたちがどうつくるかということについての研究でもありました。そして，1 人の生徒がおもちゃのクレーンを持ってきました。

<スライド 19 クレーン Der Kran>

これは非常に大きなもので，しかもリモコンでオートマチックに動くので，おもちゃでも工事現場でも子どもたちに特に人気があったのがクレーンなのです。

その次の授業で私はある現代美術作品を紹介しました。この作品もクレーンと関係があります。この作品

について私はまず次のような文章を子どもたちに読みました。では, その文章をここでもう一度引用します。

ドイツ・カールスーエ(Karlsruhe)市の中央広場で，アルゼンチンのアーティスト，レアンドロ・エルリッヒ(Leandro Erlich 1973-)[⑤]は市民の度肝を抜いた。巨大なクレーンが見慣れないものを持ち上げている。このアートクレーンのスチールワイヤーに吊るされているのは，町のそのほかの現場でクレーンが吊るしているようなコンテナや機械や建築資材ではない。はるか頭上にぶら下げられているのは何なのだろう。

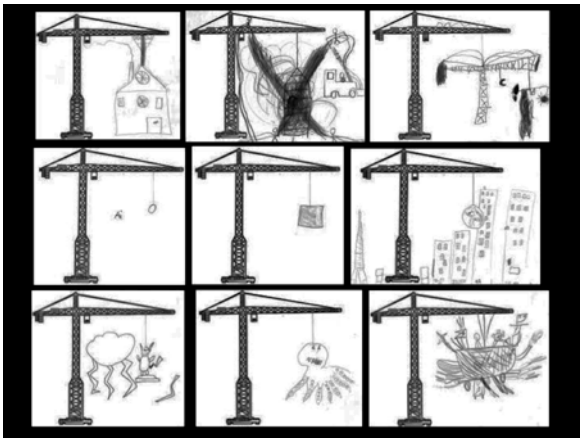
スライド 19

＜スライド 20＞

この記事を読み聞かせた後，子どもたちに予めクレーンが描かれた紙を配り，一体何がぶら下がっていると思うのかを描かせました。様々なアイディアがありました。例えば家，卵，氷の塊，水槽，ポケモンの像，そして地球外世界から来た宇宙船など。私はこういうやり方が非常に好きで，私の授業ではよくやっています。というのも，このような課題を与えたときに子どもたちの想像力がよく発揮されると思うからです。

もちろん，子どもたちが描いたものについても子どもたちと話し合います。そして，この真ん中ら辺の作品で，氷の塊をつるしている四角いブルーのものですね，この作品があります。この作品について話し合いました。どうして氷なのですか，どうして氷をつるしているのですか。そして，これを書いた子は，例えばどこかのプールが水がなくて空かもしれないと考えますた。そして，水を運ぶ方法として，水を凍らせた氷をクレーンで運んだらいい。そしてプールの中に置いたらそれが溶けて水になるのだというふうに答えたのです。

⑤日本における代表的な作品の一つはスイミングプールで,元はヴェネツィア・ビエンナーレなどで仮設展示され,2003 年に金沢21 世紀美術館に常設.金沢21 世紀美術館HP 2016.8.1 確認 https://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=17&d=1711



スライド 20

この回答がきっかけとなって，子どもたちの好奇心は大いにかきたてられたと思います。つまりこのアートクレーンは一体どんなものをつるせるのだろうかという好奇心です。

＜スライド 21 レアンドロ・エルリッヒ「根こそぎにする」Leandro Ehrlich, Pulled by the Roots, 2015 ＞

その後，エルリッヒの作品の写真を見せました。ごらんになっているのがその作品ですが，子どもたちは驚いていました。そしてなぜこの古い家に根が生えているのかそのわけを考えました。古いものは引き抜かれて新しいものに場所を譲らなければならないのです。

スライド 21

ごらんのように，このエルリッヒの作品「Pulled by the Roots」というこの作品は非常に大がかりなもので，息をのむようなスペクタクルな作品なのです。こんな大きな家の下に根が生えている，このこと，そしてこの作品全体にどんな意味があるのだろうかということを考えました。

<スライド 22 根こそぎにする Entwurzelung>

そして，1 人の子どもがこんなふうに答えたのです。どうして家に根が生えているのかは，もともと家の中に植物を入れたのだけれども，それが床を突き破って

根を出したというふうに考えたのです。ある男の子は，根というものを比喩的に考えて，人間にも根・ルーツがあるということに言及したのです。

つまり，ウアラスのルーツはドイツであります。そして皆さんのルーツはたぶん日本でしょう。そのようにいろいろな人が自分のルーツというものを持っている。そのルーツが引き抜かれるというのはどういうことなのかということを考えたのです。

スライド 22

＜スライド 23 土工事 Erdarbeiten＞

スライド 23

そして子どもたちが特に工事現場で興味を持ったもの，それはいわゆる土工事といわれる地面や土に関する作業でした。私たちは工事現場の土工事というものを見て，一体何がその地中から掘り起こされるのか，それがどういう作業なのかということを調べました。そしてその当時の土工事がどのように行われているかを示す写真をごらんいただきます(スライド 24)。

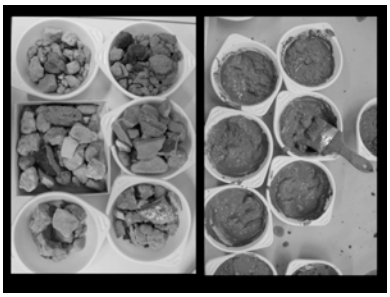
そして私は建築現場の土をとってきました。子どもたちはそれをよく調べ，分類しました(スライド 25-26)。それからその土に私は白い絵の具を混ぜました。後から黒い絵の具も使いました。左側はこどもたちがとってきた土を分類した結果なのです。ある意味，考古学の走りなど端緒であるような気がします。

次に子どもたちは１人またはグループで木の板の上に建築現場の土工事の様子を表現しました。地面の様子はどうなっているのか。何が掘り起こされているのか，何が周りに散らばっているのか，非常に表現豊かな作品が数々生まれました。子どもたちがいかに既成の型にはまらずに大いに楽しみながら創作しているかが見てとれます。

子どもたちは１人で作業したいものは１人で。そして２人でしたいものは２人で，自分で選べるようにしました。２人の作品の場合には，話し合いながら作品の制作を進めます(スライド 27)。

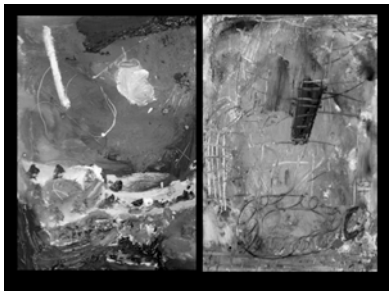
スライド 24

スライド 25

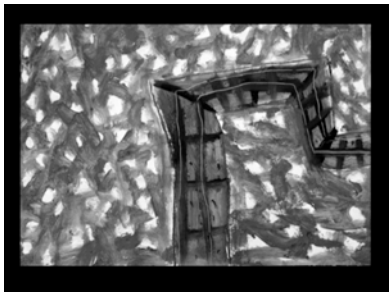


スライド 26

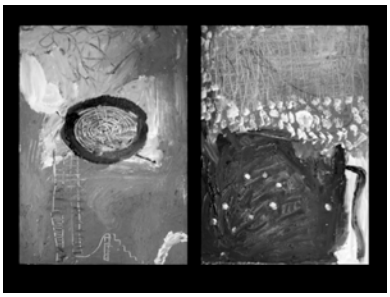
スライド 27



スライド 28



スライド 29



スライド 30

スライド 31

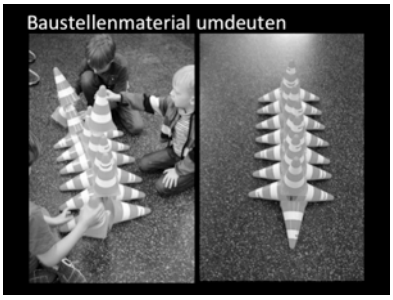
幾つかの例をごらんいただいています(スライド 28-31)。この作品は地面に掘った穴の様子だそうです(スライド 30)。

<スライド 32 アントニ・タピエス，灰色のレリーフ Antoni Tapies, Graues Relief,1963>

そしてそのすぐ後，私は子どもたちにスペインのアーティスト，アントニ・タピエス（Antoni Tàpies 1923–2012）[⑥]の作品を紹介しました。ごらんいただいているのがそのタピエスの作品です(スライド 32 は本記録集では省略)。タピエスも土や砂などを作品に使い，古代風の作品，アルカイック(古拙)な作品をつくりました。

<スライド 33 工事現場の器材，意味の転換 Baustellenmaterial umdeuten>

さて，工事現場では安全のため，また一般人の立ち入りを防ぐための機材が使われています。次の授業では，ロード・コーン(road cone)や建築工事用のシート，立入禁止のテープなどを使って様々な実験を行いました。



スライド 33

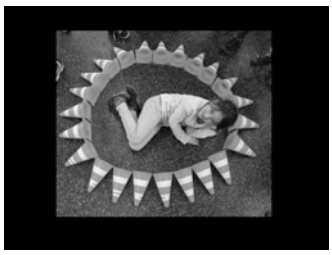
子どもたちはまずロード・コーンの新たな使い方に取り組みました。実に様々な形のパターンが生まれました。芸術とはまた物を新たに，そして従来とは異なるものとして見ることを意味します。これがその建築現場で使われている機材で遊んでいる様子です。

このように一般的に現実的な目的があって生まれているものを使って様々なパターンや模様，そして形状をつくる，これも芸術の活動であります(スライド 34-38)。そして，次のステップでは，子どもたちはグループを組んで，これらの機材を用いて自らを演出しました。このような機材でコスプレをしたらどうなるか，それによって私たちはどう変わるのか。そのとき自分は自分をどう見るのか。

---

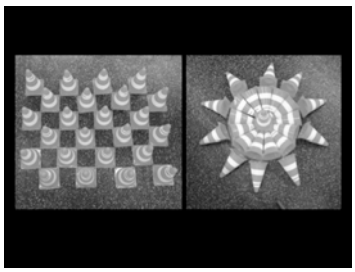
⑥1950 年にパリでアンフォルメルと出会う。大戦の記憶を下敷きに,暴力的な荒々しいタッチや生々しい質感によって人間の生の本質を抉り出そうとするアンフォルメルは,「再現としての絵画」ではなく「物質としての絵画」という絵画のあり方を提示した。これに多大な影響を受けたタピエスは以後,大理石粉などを混ぜた厚塗りの地に記号や文字を描き込んだり,引っ掻いて形象を刻みつけたり,異物を貼りつけたりすることによって独自性を獲得してゆく。 長崎県美術館 HP　2016.8.1 確認
http://www.nagasaki-museum.jp/museumInet/coa/autGetByArt.do?code=50441&command=view

スライド 34

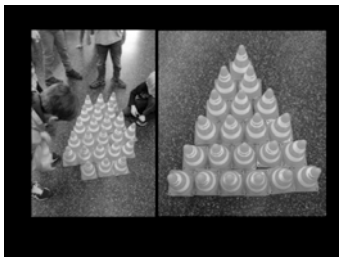


スライド 35

スライド 36



スライド 37



スライド 38

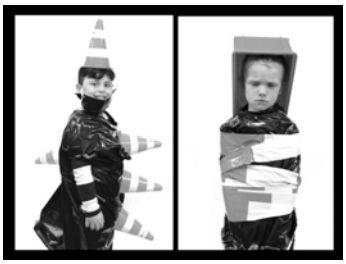
<スライド 39 自分自身を演出する
Sich selbst inszenieren>

このとき私は壁に白い大きな模造紙を張りつけて，そこにモデルが立てるようにしました。もう既に右側の写真ではコスプレをした女の子が立っています。このように普段は使わないようなものを使ってコスプレをすることは子どもたちにとって大きな喜び，楽しみだったようです(スライド 40-42)。

スライド 39

スライド 40

スライド 41



スライド 42

<スライド 43 専門家の登場 2 Bauexpertin II>

そして次の授業では，女性建築技師のダーナー(Dahner)さんが来てくれました。彼女はこの工事現場の責任者であります。彼女から子どもたちは建築工程の概要を説明され，地下につくられているものを発見し，現場で使う測定器を実際に使わせてもらいました。

また，異例のことですが，私たちは実際に建築現場にも入らせてもらいました(スライド 44-46)。子どもたちが特に興味をひかれたのは建築機械です。そうした機械の使い方について，非常に多くのことを教わり

ました。もちろん関心トップの機械がクレーンでした。そのときの写真をごらんいただいています。

スライド 43

スライド 44

スライド 45

スライド 46

また，ダーナさんは子どもたちに下水管に通ずるマンホールの下がどうなっているのかも見せてくれました。そして子どもたちは，地下には一体どんなものが埋設されているのかという興味をかき立てられました。また測定する機械を触らせてもらっているところです。

スライド 47

<スライド 47 発見:Entdeckung:Ameisenbauten>

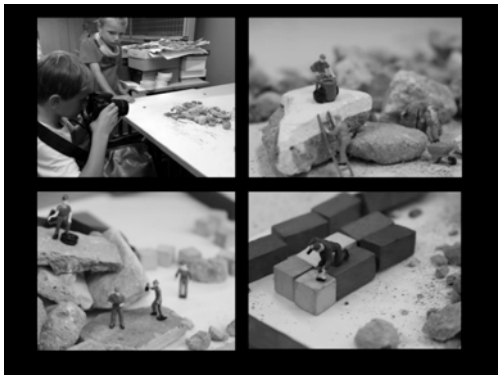
そして，校庭の建築現場のはずれで見つけた小さな建築労働者たち，それはアリです。建築をするのは人間に限りません。ほかにも建築をする生き物はいるのです。ごらんいただいているのは，アリが地中に何か構築するときに出た土を外に運び出している，その塊でした。

<スライド 48 見方を変える Perspektivverschiebung>

スライド 48

このことから，子どもたちとミニチュアの工事現場をつくりそれを写真に撮ることを思いつきました。私は小さな建築労働者の人形を用意し，子どもたちは建築現場をつくって，それを撮影しました。

ごらんになっている写真(スライド 49)はそのときのもので，子どもたちが小さなミニチュアの工事現場をつくり，それに小さな労働者の人形を配しているところです。そして，左上の写真で子どもたちが自身でそのミニチュアの工事現場を写真に撮っているところがあります。ごらんいただいているほかの３枚の写真も子どもが自分で撮ったものなのです。



スライド 49

<スライド 50 >

その後，続けて英国のアーティスト，スリンカチュ(Slinkachu)⑦の作品集，『こびとの住む街』から幾つ

⑦スリンカチュ,北川 玲訳『こびとの住む街 1』創元社,2013.

かの写真を鑑賞しました。そして，いまご覧いただいている写真がスリンカチュの『こびとの住む街』からの作品なのです。このスリンカチュという人はストリートアートの代表者といえるアーティストです（スライド 50 は本記録集では省略）。

<スライド 51 教室が工事現場に
Das Zimmer als Baustelle>

そうしている間も，外での現実の工事は進んでいます。ある日，工事現場の人が美術教室に一時的な壁を建てました。これはカフェテリアが教室にすぐ隣接するようになるからです。そして，この壁は建築用シートで覆われました。子どもたちにとって大きな制作空間ができたことになります。そこで子どもたちは幾つかのグループに分かれました。あるグループは私が用意した接着テープでその壁に絵図を描きました。

スライド 51

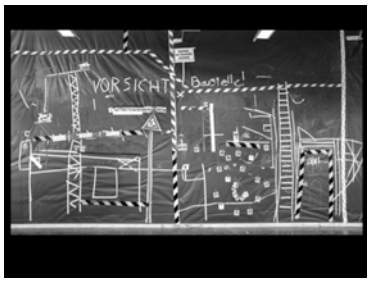
そして建築現場の様々なモチーフを用意し，文字や数字を使い，算数の授業で使ったものの残りも動員して制作しました。

また，別の子どもたちは教室の備品，厚紙のロール芯，建築資材を使って自由奔放に即興で制作することが許されました。そのときの模様をお見せします。また，そのようにして制作した壁面，次に教室内での制作の模様です。ごらんいただいているのが，建築現場の人が教室内に建てた壁面なのです。そしてそれを黒い工事用シートで覆いました。その上に子どもたちが制作をしています(スライド 52)。

子どもたちはそこで工事現場で使われているようなテープも用いて制作をしています。そのほかにもいろいろな絵の具も使いました。そしてこの壁面はすぐに手狭になってしまったので，私はほかの壁面にこの黒いシートを張って，そこも子どもたちに開放しました。そして完成した子どもたちの，あるグループの作品をごらんいただいています。

スライド 52

文字で書かれているのは「工事現場注意」というふうに書かれているのです。左に私が示したところがクレーンが描かれています。そして非常に重要だと思うのは，子どもたちがこの絵(スライド 53)の中の右下に工事現場用の簡易トイレを描いたことであります。これはドイツではディクシークロウ DIXI CLO というふうに呼びます。この真ん中(スライド 54)のところに工事現場のトイレを特に取り上げています。その横はほかの部分の拡大したものであります。



スライド 53

スライド 54

スライド 55 の奥のほうに，壁で制作している子どもたちがごらんいただけますが，そのほかの壁で制作できなかった子どもたちは，通常は使ってはいけないけれども，このときだけ許されて教室の備品，机や椅子も使って制作することが許されました。この写真で強調しておきたいのは，ここに二つの表現のメディア

スライド 55

スライド 56

スライド 57

が使われていることです。一番後ろの壁のところはテープアート，テープを媒体とした制作です。そして前面のほうにあるのが備品などを使ったインスタレーションであります。

そしてこの一つの空間の中で，二つの媒体を使った制作が進んだわけでありますが，現実にはそれは非常にカオスなのですね。そのカオスこそ芸術が生まれるときの端緒となるということが分かります。

宇田先生は導入部で前回の発表からヨーゼフ・ボイスのことも発表していただきました。ボイスは非常に重要なアーティストであって，私にとっては芸術教育の羅針盤，方向性を示す人物というふうに考えています。ボイスは非常に簡単な言葉で芸術が生まれる過程を言い表しました。その三つの言葉というのはカオス・運動・フォルムであります。つまり，初めは混沌としているカオスがその場を支配しているわけですが，それに動きがもたらされ，そして最後にフォルムができ上がるということであります。

<スライド 58 省察と発表
Reflexion und Demonstration>

そしてまたアート・プロジェクトで非常に重要なのは，行ってきたプロセスを振りかえること，省察(リフレクション)であります。そして説明，実演することであります。この写真では１人の男子が即興でつくり上げた建築機械をほかの子どもたちに実演しつつ説明しているところであります。この写真の説明されている側の子どもたちの顔をごらんいただくとわかると思うんですが，非常に魅了されて，非常に集中して発表を聞いているところなのです。

スライド 58

こうして私と子どもたちは工事現場というテーマについて様々なコンセプトで取り組みました。子どもたちは，いま夏休み後にこれをもとにどうテーマと向き合うかを独自に考えています。いまドイツは日本と同様に夏休みですが，９月にはまた学校が始まります。子どもたちは既に当初のアイデアを発展させ，次の学年で建てるというテーマでそれを実現しようとしているわけです。そのアイデアをスケッチしたり絵にしたり張りつけたりしたものを幾つかご紹介します。

<スライド 59 自分だけの建築計画を立てる
Planen des individuellen Projekts>

この写真では，子どもたちがグループをつくって９月にどのような建築をするかということを話し合っている様子が見て取れます

スライド 59

<スライド 60 子どもたちのアイディア Ideen der Kinder>

そしてごらんいただいているのが 2 週間前，最後の授業のときに子どもたちが描いたプランです。

例えば左側の中頃にある絵は建築ロボットなのです。子どもたちはこの授業を通じて建築現場での仕事というのが，しばしば非常に肉体を酷使する重労働であることを知ったわけです。そしてそのような作業を簡単にできるあるいは人間を助けるための建築ロボットがあったらいいなということでこの絵を描いたのです。

そしていま私が示したのが，ある女の子が描いているもので，この子は非常に描くのが好きで，しかもポケモンも大好きなのです。彼女は非常に精緻な絵を，ポケモンの寺院を描きました。これはグローバルな現象なのですけれども，いまちょうどポケモン Go が世界を席巻していると。日本でも非常に人気になっており，その状況はドイツでも一緒なのです。

いま示しているのがツリーハウスです(スライド 60 下段中央)。これもある女の子がツリーハウスを建てたいということで絵を描きました。

その隣にある絵は，男の子の作品で，この子はレゴが好きで，レゴのブロックを使って何かをつくりたいということで，この絵を描いています。

いま私がポインターで指している絵(スライド 60 上段右から 2 番目)は，そしてその前に幾つか指し示しました絵は，みんな建築機械なのです。最後にポインターで指した絵は，万能建築機械と銘打ったものです。見ているだけではいったいどんな機械なのかわかりにくいのですけれども，建築機械に魅せられた子どもたちが描いたものです。

真ん中の三角形になっている絵(スライド 60 中央)，これもいったい何が描かれているのかわかりづらいところがあるのですが，これを描いた子は現場で使われているエネルギー，電気ですね，電気に興味を持って，電力をどういうように供給するのか，どういうように使うのかというようなことを絵にしようと試みていました。

そして右上の Dixi と書いたのが，先ほどのディクシークロウで，工事現場の簡易トイレに非常に関心を持った男の子 2 人が描いたものです。工事現場のトイレというのは小さな小屋みたいなものなのですけれども，その子たちはこれを大きなものにしようというふうに考えています。

この作品集が現在の私のかかわっているプロジェクトの最新の状態なのです。ここから休み明けにどういうふうにしていくかが始まるということです。そして，子どもたちはこの休み中に自分たちの描いた絵に基づいて調査，リサーチを行い，そして自分のプロジェクトを完成させるための材料を集めることを宿題にしているわけです。そして，私は保護者の方々にも手紙を書きまして，今こういうことをやっているということ，そして子どもさんたちが材料を集めるという作業をするときにそれをサポートしてあげてほしいということを手紙にしました。

9 月になったら，子どもたちが自分で段取りをし，自分で構造化するような学習状況に仕向けていきたいと考えています。プロジェクトの次のステップは学校での工事の進捗によっても決まってきます。つまり，認識と省察(リフレクション)と形成がある種並行的に

スライド 60

進んでいくのです。

ちょうどこれは植物の成長にあわせて進めた私の「ひまわり」プロジェクトのときと同じです。私は工事現場という現実の状況から生きたインスピレーションを受け取りたい訳です。建築や材料，建築現場の人々，現場の騒音といった様々な観点が重要になるかもしれません。大切なのはその場で起きることにオープンな姿勢で臨むということ。子どもたちの関心と工事の進捗に対する柔軟で開かれた態度であります。なぜなら自分で決定し実現していく機会が増えるよう様々な可能性を開くことこそ基本的に重要だからです。理想的にはそれが人生の様々な難問に対し，多様な解決方法を見つけられるような学習の文化に繋がるのです。

＜スライド 61 芸術と生きる術
Kunst und Lebenskunst＞

このようにアート・プロジェクトは特定の，この場合は芸術という科目の縛りを乗り越え，分野横断的な方法であり, 学習の原則ともいえることがわかります。そのような学習プロセスにおいては，「可能性を開くこと Möglichkeiten erschließen」「可能性を実現すること Möglichkeiten verwirklichen」，できる限り「それをうまくやること(練達：質の向上 Gekonntheit (Qualität))」が重要です。そこで芸術が「生きる術」とも結びつくのです。この点が私にとっては一番重要だと思っている点であります。つまり，子どもたちや若者が芸術に触れる，あるいは芸術を実践する過程で何を学びとるかということであります。

子どもたちはいままでに紹介してきた写真からもおわかりのとおり，このプロジェクトを実践していく中で，様々な可能性を持ちます。そしてその際，何を捨てて何を取るか，自分は何をしたいのかということを自分で考え自分で判断するわけです。そして最後に子どもたちはそのしたいと思ったことを実現するわけです。その実現したものは独自のもの，彼自身のもの，ほかの誰のものでもありません。そしてそれをできるだけ上手に実現すること，それを子どもたちは目指します。それは生きることでもあると思います。

繰り返しになりますが，子どもたちは多くの可能性を有しています。しかしその中で何をするかということを決断しなければなりません。そして決断したものを実現に結びつけなければなりません。そしてその際，できるだけいい決断をしていい実践をする実現の仕方をするということが求められます。そのことが私にとっては生きることと芸術を結びつける大きな一つの要素であろうと思っています。

そのように考えるとき，美術の教師は，単に自分が芸術家であるだけでは足りません。人類学者でありジャーナリストであり，社会学者であり教育学者であらなければならないし，インターネットのウォッチャーであり，何よりもプロジェクトを企画・実行できる人間でなければなりません。教師や研究者の皆さん，私たちは子どもたちの芸術的な思考と行動，創造的な振る舞いの発達を助けることもできればそれを阻害することもできます。そのことを自覚したいと思います。

この子どもたちが，表現や形成の独自の方法を追求することを学ぶとき，彼らはどう生きるかを自分で決めるという根本的に重要な能力を学んでいるのです。

あることに対して個人の立ち位置をはっきりとさせるということは，複雑で多様なグローバルな社会における個人に課せられた要請であります。そしてそれは常にどんな人も持っている自由と責任の総体を拡大するという大きな目標に通じているのだと考えています。

＜スライド 62＞

ご清聴ありがとうございました(Vielen Dank!)。
(拍手)

宇田：Mario, thank you for wonduful lecture.

ちょっと照明を明るくしてもらいましょうか。それでは，すばらしい発表がありましたので，ここで，指定質問者からの質問を受けたいと思います。フロアーから対面したほうがしゃべりやすいですね。では，岡田先生，辻さん，その場所からお願いします。

講演中のウアラス氏

■14：35–15：10　質問と対話

質疑応答は，日本語による質問→松坂氏によるドイツ語訳→ウアラス氏のドイツ語による回答→松坂氏の日本語訳の順に行われ，参会者に伝わった。以下のウアラス氏の発言は，松坂氏が通訳したものである。なお，通訳は内容のまとまりにそって区切って行われた。

＜指定質問者 質疑応答＞

岡田陽子(大阪千代田短期大学・前大阪府河南町立白木小学校長)：ウアラス先生，講演，どうもありがとうございました。8年前に大阪国際交流センターでの InSEA 大阪大会でも質問させていただき，また今日も先生に質問できることを大変うれしく思っております，ありがとうございました。

前回の８年前にも質問したことと重なるかもしれませんが，日本で，ここ大阪でも「造形遊び」ということにちょっとつながっているのですけれども，なかなか日本の小学校では「造形遊び」は盛んではありません。またドイツでのそういう「造形遊び」的なプロジェクトも稀であり少ないですと８年前におっしゃっておられました。今日のアート・プロジェクト「工事現場での実践」を聞かせてもらって大変興味深く，本当におもしろいなと思いました。

それで質問なのですけれども，ドイツではこの「工事現場」のアート・プロジェクトに小学校の先生が一緒に参加されているのか，見ているのか，また，そこで小学校の先生が授業の中でつながっているのかをお聞きしたいです。小学校とウアラス先生とのつながりで，地域，周りの「工事現場」の人とのつながりもありましたが，そういう様にどんどん大きくつながっていくのかというところがとても興味があります。よろしくお願いします。

ウアラス：岡田先生，まずは私の発表に大変関心を持っていただきありがとうございます。

最初のご質問なのですけれども，残念ながら今回のアート・プロジェクトでは私１人であります。もちろん私はプロジェクト志向の学習というものがもっといろいろなシーンで実践されていくべきだと思っていますし，この 90 分の授業の後，できるだけ学校の先生と交歓会を持つようにはしているのですが，残念ながら一緒にやってくれる人はまだいないです。これがいま私が抱えている問題かなというように思っています。先生個人が好奇心を示してくださるのですけれども，実践をするということはない，非常にまれな単独の例というふうに考えてもいいかと思います。しかし，私自身はこういう活動をほかの先生も実践してもらいたいなというふうには思っています。

岡田先生は大変重要なことに言及してくださいました。つまり，このプロジェクトでは，現場の人たちを取り込んだということです。現実に現場で働いている人たちに来てもらったということです。以前はこういうことはしなかったのですが，非常に重要で有意義なことだというふうに思いました。つまり，これを通して子どもたちは現実の生活世界の一端に触れることができるわけです。そして，私は全然建築について何も知りませんので，本当にそのことを仕事にしている人から大事なことを聞く機会を子どもたちが得た。そして，私自身も初めて聞くことが多かったので，非常に私自身も勉強になりました。このように，現実の生活世界に子どもたちが触れる機会を持たせるということも非常に大事だと思いました。

私は講演の中で，バーデン＝ヴュルテンベルク州の新しい教育計画について触れましたが，その中で，美術教育の眼目がどこにあるかということを生徒が自己認識と世界認識を獲得することだというふうにご紹介しました。そのことにこれは関係してくるというふうに思います。世の中は専門化が進み，多くのことに専門家がいます。その人たちから生の話を聞くことが，世界を認識することの一方であろうというふうに思うわけです。

宇田：続けて，辻さんお願いします。

辻 大地(こどもアートスタジオ 副代表)：すばらしい活動報告をありがとうございます。ウアラス先生の発表を見ていて，エリー・デューリング(Elie During 1972-)の「プロトタイプ論」[8]で紹介されていた

⑧エリー・デューリング,武田宙也訳「プロトタイプ：芸術作品の新たな身分」『現代思想』2015年1月号 (特集=現代思想の新展開2015 -思弁的実在論と新しい唯物論),青土社,2015.

パナマレンコ(Panamarenko ベルギー 1940-)⑨というアーティストを思い出しました。パナマレンコは理想の飛行機の試作品をつくり続けているアーティストです。

さて質問なのですが，岡田先生の話につながるようなかたちになると思うのですが，図画工作，美術の専門の先生でない方々がウアラスさんのプロジェクト型アートを行うときに，作る・リフレクションするというような，数カ月にわたる内容をどのように構造化すれば専門の先生でない方々も行うことが可能なのか？いま考えられる範囲でお答えいただければと思います。よろしくお願いします。

ウアラス：まずはご質問ありがとうございます。そしてまた，パナマレンコに言及してくださったことも大変ありがたく思います。私自身も非常にパナマレンコを評価している人間だからであります。

日本で辻さんがなさっているような活動(放課後や休日での民間のアート教室)がドイツにもないわけではありません。つまり，民間の領域でこういう芸術の教室を開き，子どもや少年たちにその可能性を与えるということであります。現に，私の仕事場であるハイデルベルクにもそういうことをやっている女性がいて，非常に親しくしています。

私が紹介したような形でのアート・プロジェクトの実施というのは，そういう民間ベースでは確かに難しいところがあると思いますが，ないわけではありません。現実に，例えば私の知っているところでは，民間の領域でもこういったプロジェクトが試みられています。そのテーマは，例えば「人と動物」というものでありました。

そして，民間ならではの強みというものもあると思うのです。つまり，国の定めた指導要領だとか，そういうものに縛られないという利点もあると思います。現にこの私が研究しました「人と動物」あるいは「人と生物」というプロジェクトでは，個人が参加した子どもたちが成果を生み，それはハイデルベルク動物園で展示されました。

それと，特に民間で活動する場合に重要なことを２点申し上げたいと思うのですが，一つはスポンサーを探すということだと思います。例えば，先ほど言いました「人間と生物」「人間と動物」というプロジェクトのときには，ハイデルベルク動物園が一種のサポーターになってくれたわけであります。そういうことをすることによって，子どもたちが材料を探すことが簡単になり材料も選びやすくなるということがあります。

それともう１点は，子どもたちの保護者の方々を説得する，意図しているプロジェクトのよさを，何がいいのかということをわかってもらうように働きかけるということではないかと思います。つまり，絵画教室に通ってくるのは，毎週，行ったら必ず新しい絵を持って帰るとか，何か絵がうまくなる技能を学んでいるということを親に見せるだけなのではないと。芸術を通して何を学んでいるかということ，芸術を通して学べることの重要さというようなことを保護者の方にわかってもらうように働きかけるということではないでしょうか。

それと，辻さんが言ってくださったことに関連して私がもう一つ言いたいと思っているのは，既に私どもでも，大学と民間ベースの芸術活動とは協力が成立しているということであります。そして，これはもう既にやられていることなのですけれども，例えば，夏休みといった長期に時間が自由になるチャンスに１週間なりのインセンティブコース・集中コースというものを民間でやってもらい，そこに私の学生たちがサポーターとして入るということです。

そこで技能を教えるというのではなくて，テーマ性のあるコースをやって，そこで子どもたちがそのテーマにどんな関心を持つか，そしてその関心をどういうふうに作品なり昇華していくかということをテーマにしたいと思っています。そのようなやり方は民間ベースでもできるのではないかというように考えました。

＜フロアーとの質疑応答＞

宇田：ありがとうございました。せっかくですから，会場の一般の方からも何かあれば受け付けたいと思うのですが，いかがでしょうか。お一人かお二人くらい大丈夫かと思うのです。いかがでしょうか。よろしいですか。手が挙がりました。ご所属，お名前などをお願いいたします。

---

⑨60 年代中頃から様々な「ハプニング」を行うと同時に,特異な「詩的オブジェ」を制作.その後,ヨーゼフ・ボイスやマルセル・ブロータースとの出会い,精神的交流を経て,67 年に最初に人力駆動ヘリコプターを発表.以後,飛ぶことを想定しながらも実際には殆ど飛べない「飛行機」や「飛行装置」,独自な理論に基づく「磁気航空装置」など詩的なテクノロジー作品を作り続けている. 国立国際美術館 HP 2016.8.1 確認
http://www.nmao.go.jp/exhibition/1992/id_0830123934.html

山口三佐子(大阪府豊中市立豊島小学校)：私は豊中市の豊島小学校で図工を担当しております山口といいます。図工の教科書のほうが，造形教育のほうにかなりシフトをしておりまして，教科書の内容がほとんどダンボールや新聞紙，廃材などを使って，外でやるような活動，パワフルな活動，ダイナミックな活動に変わっているのです。

私は勉強不足で，今までどうしても出来栄えがいい図工，見栄えのいい作品にこだわるところがあって，子どもたちによりよい作品，よりよい技術を身につけさせることに重点を置くところがあったのです。今まで，どうしてもそういった自分の見栄というか，教師の図工の作品は外に展示することが多いので，どうしても見栄があって，それにこだわる所があったのですが，やはり違うのではないかということを考えてきたのです。図工はそんな作品の出来栄えのようなものが左右するような小さなものではないというのにだんだん勉強していって気づきました。

それでちょっと勉強を始めまして，教科書に載っていた新聞紙を丸めて家をつくったりタワーをつくったりすることに取り組んだのです。そしたら，先生が先ほどおっしゃったみたいにすばらしい子どもたちの集中力，それから情熱，休み時間もやりに来る，放課後もやりに来る，そしてすばらしいアイデアをどんどん出してきて，日ごろ図工が得意と思えなかった子がものすごく意欲的に取り組んで，情緒障がいの子どももすごい集中力がついて，学期末に感想を書かせましたら，私は新聞紙の工作より，実を言うと土の工作などいろいろやって，そちらにエネルギーをかけたのです。新聞紙は初めての取り組みで，それほどエネルギーをかけてないというか，かけきれていなかったにもかかわらず，一番人気だったのです。

宇田:それでは，それを踏まえて聞きましょうか。

山口:前置きが長くてすみません。私が聞きたいのは，先生がおっしゃる美術教育がすばらしいということを実感したのですが，周りの教師や大人はやはりそうは思わない，新聞紙が散らかって困るとか，場所がないとか，時間的なものとか，そういったもので評価されにくいのです。そのあたりを認めてもらうために，どのような活動をしていったらいいのか，その辺りをちょっと教えていただきたいと思います。

ウアラス：山口さんのなさったことをちょっと伺って，見栄えのいい作品をこれまで評価する傾向があったけれども，それはちょっと違うと思ったというお話しでしたが，私は必ずしもそうとは言えないのではないかと考えています。というのは，クオリティーは非常に大事なのです。私がやっているプロジェクトでもそれは大事だと思います。私自身もアーティストですから，何をやってもやはりクオリティーの高いものを，絵を作りたいし，それを評価したいというふうに思います。まずそれが１点。

そして，山口さんが悩んでおられる点も私は非常に共感するもので，私が先ほど言いましたように，私も同じような状況をもって，苦しい点は同じだからであります。しかしそのとき，これが誰のためにいいことなのか，周りの大人に評価されることがいいのか，あるいは同僚に評価されることがいいのかということを考えたときに，子どもたちがあのような情熱や集中力を示して，休み時間もそれにかかわったということ，これは何か正しいことをしたという実感がありますよね，教える側にとっては。

ウアラス氏と通訳の松坂氏

このことを私たち教師が同僚に言ったり，親御さんに言ったりすることもいいかもしれませんが，子どもたち自身が言ってくれることが一番いいと思うのです。子どもが興奮してこんなことをやったのだよということを親が聞くことによって，長い道のりかもしれませんが，それでこんなに喜んでいるのかということを大人も見るということ，これが一つ方策になるのではないかと思います。

それともう１点は，私は，ドイツでは「エリタンアーベント ElternAbend」と言いまして，保護者の方が夕方，学校に来て教師たちと話をするという行事があるのですが，それに私も招かれることがあり，そのチャンスがあれば必ず行きます。そして，自分がやって

いることが何なのか，どういう意義があるのかということを地道に保護者の方にお話ししていくということに徹しています。よろしいでしょうか。

宇田：はい，ありがとうございました。この辺が通訳を通す難しさといいますか，他の言語に訳す難しさで，時間がかかってしまい申しわけございません。

それでは長くやってまいりましたので，いったん休憩に入りたいと思うのです。先ほど冒頭で言いましたように，夕方からの懇親交流会の一応申し込み締めをしたいと思います。受付のところで丸をしていただくか，あるいは直接，いま質問していただいた岡田陽子先生に申し出ていただく，これで確定して連絡したい思っています。よろしくお願いします。

それから，当日参加の方，この冊子は手づくりなのですけれども，終わった後でテープ起こしをしまして新たな冊子を製本・刊行して皆さんに送ろうと思っています。当日参加の方はたぶん住所をお書きでない方もいらっしゃると思いますので，書いていただいて受付に出してください。

それでは，かなり集中してやってきましたので，お疲れだと思いますので，15 分休憩をとります。次の再開を３時 25 分からにしたいと思います。お水をとり，疲れを癒していただければと思います。それでは，休憩に入ります。前半，ウアラスさん，ありがとうございました。（拍手）

（休憩）

■15：25–16:40
シンポジウム–其々の立場からの現状認識とウアラス氏との対話

シンポジウムは，ウアラス氏との対話の形をとり各シンポジストの日本語による質問→松坂氏によるドイツ語訳→ウアラス氏のドイツ語による回答→松坂氏の日本語訳の順に行われ参会者に伝わった。以下のウアラス氏の回答は，松坂氏が通訳したものである。なお通訳は内容のまとまりにそって区切って行われた。

宇田:では，後半を始めていきたいと思います。前半でいろいろなご紹介がありましたけれども，後半は４人のシンポジストの出番がある予定でしたが，実は，佐藤先生が少し遅れて来られるということなので３人になるのですが，自分の立場について日本語でお話していただきます。

その部分は，今回はドイツ語に訳さないことになっています。その代わりにこの冊子に，福本先生でしたら 32 頁からなのですが，その日本語バージョンを英語には翻訳していまして，ウアラスさんに事前にお見せしているということです。

５分から７分ぐらい日本語で話していただいて，その後の質問のみドイツ語に訳します。先ほど見ていただいたように，伝えるのがなかなか難しい面があり，いろいろな言語の壁もあるのですけれども頑張っていきたいと思っています。

それから，いま会場からいろいろと質問が出た中で，日本でも「造形遊び」あるいは自主的な，主体的な，創造的な活動というのは親御さんになかなか理解されにくい面があります。これをどうしていけばいいかという共通認識があると思うのですけれども，それはどうもドイツでも同じようです。これはウアラスさんのホームページに出ている「ひまわり」プロジェクトなのです。ひまわりプロジェクトのトップページにこれが出てきます。

An example.

Results of Grade Three Art Lessons. Heidelberg

「ひまわり」プロジェクトのスライド

https://www.ph-heidelberg.de/fileadmin/ms-faecher/kunst/PROJEKTE_GS/SONNENBLUME__Kompatibilitätsmodus_.pdf

これは何を表わしているかというと，画一的な題材の事例ということで，実を言うとドイツでも，普通の教室ではこのように同じような物を同じやり方で描くやり方，そちらの方がむしろ多いのです。この状況というのは，日本と共通のものがあるのではないか。しかし，ウアラスさんはこの状況を打破するために，「ひまわり」というテーマであれば，本日の講演にあったように領域横断的に，「私ならこのようなことをやりますよ」というご提案をされています。そのようにお考えいただいたらと思います。つまり，ドイツでもい

ろいろとアピールされているということを感じていただきながら，聞いていただければと思います。

それでは, スタートしていきたいと思います。では, シンポジストのトップバッター，兵庫教育大学の福本先生，よろしくお願いいたします。

プロジェクト学習・課題解決学習における美術の分野の可能性から

福本謹一(兵庫教育大学)： 皆さんこんにちは。座ったままで失礼させていただきます。美術科教育学会のリサーチフォーラムですけれども，最初に紹介がなかったのですけれども，実は兵庫教育大学の国際交流センターも共催しております。

宇田：すみません。紹介し忘れました(笑)。

福本：海外研究者招聘招プログラムというものにのって，今回の美術科教育学会とタイアップさせていただいているということを申し上げます。

時間がだいぶ押しておりますので，私のほうはこの冊子の 32 頁，33 頁(本記録集 39-41 頁)に簡単にこのプロジェクト学習，「課題解決学習における美術分野の可能性から」ということで書かせていただいております。

ご存じの方もいらっしゃると思いますけれども，次期学習指導要領，文科省のほうとしては本年度中に告示する方向でいま動いております。その中で，次期学習指導要領がナショナルカリキュラム全体にわたって，教育課程の資質・能力で整理しようという方向で動いています。

その資質・能力については，「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性等」という三つの柱で整理しようという動きになっております。それと関連して，アクティブ・ラーニングに三つの要素があるのだということで，少し触れております。

このアクティブ・ラーニングというものを全教科で重視していこうということで，現在いろいろな検討が行なわれています。そのようなことと関連して，今回マリオさんの発表と関連付けて，このアクティブ・ラーニングの中に課題解決学習というものが一つの方法論として位置付けられていますけれども，これと関連付けて，いわゆる図画工作，あるいは美術科の中でアクティブ・ラーニングをどのようにとらえればいいのかということが，非常に重要なものになってくると思います。

人によっては美術科や図工というのは，もうすでにいろいろな創作学習が絡んでいるのであれば，アクティブ・ラーニングをやっているとおっしゃる方もいらっしゃいますけれども, そのようなことだけではなく，このアクティブ・ラーニングが持っている三つの要素というものから，どのように考えればいいのかということを教科の論理の中で再度見直していくことが求められていると思います。

質問として，今回マリオさんのほうにお願いしたいのは，いくつかあるのですけれども，まず一つ目が，ドイツの 13 の州の中で，マリオさんがおられる州での教育課程というものがコンピテンシー(資質･能力)という観点で作られているのかどうかということを確認させていただきたいです。

2 点目は, このプロジェクト型の学習というものが，美術教育を改革していく改革的視点というか，変える力となり得るのかどうかということをお伺いしたいです。もうすでに先ほどの質問等でもお答えいただいている部分があるかと思いますけれども，再度そういうことでお聞きしたいです。

それから，三つ目ですけれども，マリオさんの先ほどの活動は小学生を対象にしたものでありながら，最後に必ず鑑賞が入っているというか，美術作品を示して子どもたちがやった活動がリフレクションする中で，実は様々な作家とのそのような造形的・美術的な美的な価値があるのだということを再認識させていくということが特徴の一つだと思います。そういったことと関連付けて，いわゆる美術教師に求められる知識といったところをどのように考えていけばいいのかということを教えていただければいいかと思います。

とりあえずですから，質問としてはこの三つを尋ねさせていただきましたので，よろしくお願いいたします。

宇田：そうですね，一つずついきましょうか。それでは松坂さんお願いします。

ウアラス：お尋ねについて二つの面が考えられています。一つは，成果としての観点です。つまり，技能，芸術に対する知識，また日常の審美観ということをおっしゃいました。これがあります。それともう一

つの観点は，人格的な観点・人格的な能力ということです。これに関連して，私はきょう自分のプロジェクトを紹介したと思います。そこで中心となっていたのは，自分を思考する学習，あるいは自分でモチベーションを持つ学習というかたちでありました。

つまり授業の中で形的な観点のほかに，子どもがそこで何を体験して学んでいくのかという観点を重視しようということです。この意味での能力というものが，ドイツの教育計画においても，ここ 10 年来非常に中心的な論点になっています。

ウアラス：そして，一言付け加えたいと思いますが，私が先に自分の講演の中でバーデン・ヴュルッテンベルク(Baden-Wuerttemberg)州の次期学習計画について，その引用を行ないましたが，そこにあった一文です。つまり，その芸術教育の眼目なのですが，それは自らの立ち位置を決める，あるいは自らの意見を持つという言い方もできると思いますが，そのことが眼目であるという表現をされていました。

そして，それは砕いて言えば，子どもたちが世界における自分の役割というものを見つけるということであり，それは子どもたちの人格形成において非常に重要なことだと考えられているということです。

よろしいでしょうか。はい。2 番目が少しよく分からなかったので。

福本：2 番目は，美術教育というか，現状です。先ほどもおっしゃいましたけれども，実際に先生方はなかなかマリオさんのようなものを受け入れ難いということでしたけれども，そのような変革的な一つの契機というか，きっかけになるものというのはどのような部分かということをお願いします。

ウアラス：2 番目のご質問ですけれども，この問いに対する答えが，私に与えられたら私がこの答えを出せたらどれだけいいかと思います。つまり，答えはないのです。日本でもドイツでもそうでしょうが，美術の教科というのはどちらかと言うと冷や飯を食っているわけです。どうしても前面に，特に近年は経済的な原理が非常に強調されている面があります。

しかし，美術教育や芸術の教育から学べるものは人の創造性，そして想像の力を培うことだというふうに思います。そのことは，経済的に考えることよりもある意味重要ではないかと思うわけです。私たちはそう思っていますが，そう思っている私たちの言っていること，つまり美術の教科が前面に出てくるのかと言うと，そういう現状ではありません。そして，それがもっと重要視され，存在感を主張するにはどうしたらいいかというようなレセプトはないと私は思います。

実際，私たちと同じ考えにある者たちが，これがどれだけ素晴らしいことで重要かということを正当化しようとして努力してきましたが，なかなか耳を傾けてもらえないのが現状で，これを私は戦いだと思っています。

ウアラス：逆に，私から福本先生にもお尋ねしたいと思いますが，私がいま述べたバーデン＝ヴェルデンブルク州の教育計画に書かれていた，「自分の意見を持つ，あるいは自分のポジションを見出す」という教育の肝要な点，そして，「ほかの人とは違う意見を形成することができるということ」，それが中心的な重要事項として挙げられているということを申し上げたと思うのですが，同じようなことを日本の教育課程，あるいはカリキュラムでも取り上げておられますか。

福本：先ほど，自己認識と世界認識を統合化するというような意味でおっしゃったと思うのですけれども，そのような独自性を発揮することの表現活動を通して自己認識を高めるという概念はなくて，先生がされている活動というのは，いわゆる相互干渉という側面が活動の中に含まれていて，自分の活動と他者の活動というものを相互に高め合うという部分が非常に重要だと思っています。

そういった意味で，日本の中でこれまで非常に自己表現ということに価値が置かれてやられた部分もありますけれども，自己と他者の共創，共に創造する，作り出すという共同参画的な活動というものを，このアクティブ・ラーニングでこれから強調されるということで，そのような活動が重要になるということです。

これは三つ目の質問にも関わってくるのですけれども，先ほどと少し言い方を変えると，先生の活動は，

フロアーの様子

初めに鑑賞ありきではなくて，活動のあとに何らかの現代アートとの関わりを示唆するということも含めて，子どもたちの活動と造形世界の作品やパフォーマンスというものが同じフラットな次元に立っているということを，子どもたちに認識させることにつながっていると思っています。

そういう意味で，私も教員養成という立場でありますので，美術教育における教員養成の中で，先生のやっている活動は小学校での「造形遊び」のように一面では見える活動にはなっています。けれども，別の意味で言うと表現と鑑賞が一体化された活動だと思います。そういった意味で，鑑賞的な部分をどのように表現の中に取り込んでいくかということに少し視点を置いたような教員養成を考えていかなければいけないと，美術教諭の立場で反省もしているところです。

ウアラス：どうもありがとうございました。時間かかってすみません。

福本：はい。ありがとうございました。3 番目の質問は，後ほど時間があったらお聞きしたいと思います。

宇田：では，いったん区切らせていただきます。それでは 2 番目の湯川先生。ドイツ在住 19 年で，いろいろな経験や学びからの質問やご意見ということになります。それでは湯川先生，お願いいたします。

ドイツの学校教育で実践されている美術の題材やカリキュラムについて–ドイツ・デュッセルドルフでの生活・芸術体験から

湯川雅紀(関西福祉科学大学)：関西福祉科学大学の湯川と申します。よろしくお願いします。宇田先生は，1 回自分の意見を述べてからとおっしゃっていたのですが，逐一質問していくかたちでもよろしいでしょうか。

宇田：そのほうがよろしいですね。

湯川：はい。冊子で言うと 35 頁から私のページが始まり，36 頁(本記録集 42-44 頁)まで続いています。質問事項も 3 点用意しておりましたが，これに関連して，実際に自分のドイツでの生活と体験をもとに，ウアラス先生に質問させていただきたいと思います。

私はドイツで，クンストアカデミー・デュッセルドルフ(Kunstakademie Düsseldorf)というところで学びましたが，その間に 2 人子どもが生まれまして，ドイツの学校に通わせていました。私も絵を描いていますので，美術の授業ではどのようなことをやっているのかと興味を持ってみていたら，上の子が小学校 2 年生のときに，絵の具の練習として塗り絵を持ってきました。それを「パパ，できた」と。何かというと，アンディ・ウォーホル(Andy Warhol 米 1928-1987)の「カエル」で，いろいろと自分の好きな色に塗ろうという題材だったのです。私はそれを見て，小学校 2 年生にウォーホルのぬり絵をさせるのかと驚きました。

次に何をするのかと見ていると，今度はジョアン・ミロ(Joan Miró i Ferrà スペイン 1893-1983)の絵を鑑賞して，その中に出てくる形をいろいろな素材を使って自分で工作してモビールを作るという授業をしていました。それは非常におもしろいと思って，先ほど福本先生もおっしゃっていましたけれども，鑑賞と表現というものが密接に関連した美術の授業ができていると思ったのが非常に印象的でした。

私の娘が行っていた学校は，ノルトライン＝ヴェストファーレン州のヴッパータール(Wuppertal)という町の小学校だったのですが，ドイツの美術教育のカリキュラムの中では，鑑賞と表現方法，特に美術史と関連させたような授業，それは一般的なのでしょうか。それとも州によって違いがあるのでしょうか。その点についてお聞かせいただけますか。

ウアラス：まず，ご質問ありがとうございました。いま湯川さんが報告してくださったお子さんの例は，ドイツの現状を非常によく表していて，よく見られる現象だと思います。そして私はそれを問題ありだと見ているのです。

ドイツの小学校では，美術を教える教師の 80%がきちんとした養成を受けた人ではないそうです。そしてその人たちは試行錯誤する中，役に立つ本などに手を延ばすわけですけれども，そこに書かれているものが，おそらくアンディ・ウォーホルのぬり絵であったりミロの絵だったりするのでしょう。

しかし，そのような授業のやり方の場合，子どもたちが主体になっていないと思うのです。子どもたちがその背後に感じられないということで私は問題ありだと見ているのです。そして，そのようなアプローチの仕方をした芸術というのは誤解を生むと思っています。

もちろん，そのようなアプローチでアーティストやその作品を知ることはあると思います。そして誤解だと思うのは，特にそのぬり絵などの場合，模倣によっ

てアートに近づいたと子どもたちに思わせてしまうのではないかと思うわけです。

ここで翻って，私がプレゼンの中で紹介した土工事というのがありました。あのときは，まず子どもたちに実際に土や砂を使ってそれに絵具を混ぜて，彼らは自分の手で作品を作りました。そして，その後にアントニ・タピエスを紹介しています。そこにはイミテーションはありません。彼らは実際にもう作った後で著名なアーティストの作品を見ているのです。ですからそれを考えると，最初にご報告されたようなぬり絵の例などは，ドイツ語でいう Imitation Lehrende Methode 模倣教授法というのでしょうか，そのようなものではないかと思います。

もちろん，これは非常にやりやすいアプローチであって，すぐに子どもたちに芸術を実践した気持ちにならせて，また見栄えのいい作品を作ることにつながるので，手を伸ばしたいアプローチではあると思いますが，私は危険な方法だと思います。

湯川：ありがとうございます。美術に親しみ，触れるという鑑賞の一つの例として，どのようなことだったのかと思い質問させていただきました。確かに，ギムナジウムの先生におききしたときには，このような教本がありますと言って，いろいろな印象派なら印象派の，表現主義なら表現主義の教科書のような，副読本のようなものをたくさん用意されているのを目にしました。

そのようなところで，美術が専門ではない小学校の先生たちがそういうものに頼って美術を教えていっているという現状があるのだとよく分りました。でも，例えば日本だと美術に触れる鑑賞というところで，まだまだ小学生の時点で美術史や美術作品に触れるという経験をあまりさせていないので，その辺が少しドイツと日本の違うところだと思ったので，そのように例として挙げさせてもらいました。

湯川：2 点目の質問です。うちの子がギムナジウムに入りました。8 年生，9 年生で分化学習（ディファレンティーレングクルス Differenzierungskurse）というものをとったのです。それでうちの子は，「美術／音楽（Kunst/Musik）」という教科を 1 年間とったのです。それは，音楽と美術の重なった領域についてのいろいろなことを学ぶということで，最初はカンディンスキー(Wassily Kandinsky 1866-1944)における音楽と美術の関わりや，音楽と美術における印象派の違いなどのテーマが設定されていました。

そのあとミュージカルをやって，ナチスドイツ下の音楽と美術のようなこともやっていたと思います。そのような形で，音楽と美術以外にも，「生物／科学」などいろいろな教科横断的なコースがあり，これを 1 度，僕は取材させていただいたのです。

この意味というか，こういう授業はやはりドイツでは普通に行われていることなのでしょうか。それとも，やはり州によって違うのか。また，もともとの目的は何だったのかという辺りを少し教えていただければと思います。

ウアラス:質問ありがとうございます。大変興味深い点についてお尋ねいただきました。ご存じのように，ドイツは連邦制度ですので 16 州ありまして，それぞれが違う教育計画をもっています。つまり，地方分権で，教育内容が各州に任されている連邦主義ならではのやり方だと思います。

ということは，Differenzierungskurse といわれる分化学習を行っているところは，これも州によって違うということです。娘さんの例では「Kunst/Musik」で，美術と音楽というコンビネーションのコースを選ばれたわけですが，必ずしも二つの異質なもの，あるいは近接していてもいいのですが，二つのものが一緒にコースを形成しているわけではありません。州によっては，例えば生物学や外国語あるいは数学といった単教科をだけ深めるというような可能性を提供している州もあります。

しかし，ここで主眼となっているものは何かといえば，子どもたちが，それぞれ異なる資質をこれぐらいの年齢になっていると持っていて，関心もそれぞれに違うということです。これから大学教育を受けようという，そういう年齢の子どもたちの要求というものを満たすという意味で，「Differenzierungskurse 分化学習」というものが提供されています。

子どもたちは，このコースを全く自分で選ぶことができます。自分の関心や得意なことによってそれを選ぶことができ，選んだものを集中して勉強し深めていくという可能性を提供しているコースです。よろしいでしょうか。

湯川：はい。うちの子どもが行っていたギムナジウムでは７教科か８教科ぐらいの組み合わせが提供されていました。

湯川：私はその Differenzierung という単語がうまく訳せなくて分化学習と書いていますけれども，Differenzierun というのが，実際にどのようなニュア

ンスなのか自分の中でも分らなかったので質問させていただきましたが，何となくイメージはつかめてきました。

ウアラス：Differenzierun 自体には，生物学では発達と分化ということでこの動詞が使われたりすると思うのですが，ここではポジティブな意味で，要するに人とは違う関心，人と違う要請を満たしてあげようという意味での，ポジティブなことを考えての分化学習ということです。

湯川：本当に，各学生それぞれの興味などをどんどんとこう探究していく感じですね。

ウアラス：そうです。

湯川：分りました。ありがとうございました。

宇田：では，いったんよろしいですか。湯川先生ありがとうございました。ドイツで生活された実感からのお話でありました。それでは続きまして，3 人目のシンポジストである鈴木幹雄先生，よろしくお願いいたします。先生のページは冊子 38 頁から 40 頁(本記録集 45-47 頁)です。それでは，よろしくお願いいたします。

芸術教育の「フレクシブルな実践」と教員養成を支えるものードイツ芸術教育学が遺した遺産を再省察する（ドイツ改革派芸術学校とそこにおける芸術教育学研究の立場から）

鈴木幹雄(神戸大学)：神戸大学の鈴木です。日本にようこそおいで戴きました。８年ぶりの再会で喜んでおります。(ドイツ語による歓迎の挨拶)

鈴木：ある部分は日本語でしゃべります。訳をお願いする時は，「ここは訳をお願いします」とお伝え致します。では，最初にきょうの資料の冊子の 29 頁(本記録集 36 頁)を開けてください。左側の真ん中にマリオ・ウアラスさんの実践授業のウェブサイトがあります。五つほどありますけれども，私たちは宇田先生からこれをメールでお送りいただいておりまして，これを見た上できょうの工事現場プロジェクトを見ました。ですから，会場の皆さんにはお願いがありますが，後で，このホームページに載っているウアラスさんの実践報告を見た上で，全体像の一環の中に位置づけて今日の実践報告を見ていただきたいと思います。

ではまず，資料の 38 頁(本記録集 45 頁)，ご年配の方にお渡しいたしました配付資料の大きめの文字は 2 頁を見てください。そこに，最初に「造形遊び」とドイツの芸術教育との関係に触れて説明があります。ドイツの芸術教育と造形遊びを結びつけるのは，単純化されたときに非常にリスクがあります。

異質なものを混同して，どちらも結果的につぶしてしまうリスクがあります。ただ大事なことは，日本の「造形遊び」もいろいろな矛盾をはらみながら，あるいは「今日では初期の生産的な意味をなかなか持てなくなってきている」という指摘が多くされているなかにありながらも，表現教育，図工や美術教育をフレキシブルに組み立てる可能性とその糸口がありました。

これは非常に大事なことで，その端緒に糸口としてあった可能性を見た上でドイツの芸術教育との関係性を見るということは非常に大事なことだと思います。きょうお話が出ましたプロジェクトメソッドの場合でも，全てのそのような開拓された教育アプローチというのは本来出発点として非常に大きな可能性を持っており，ポジティブなものを持っていたわけです。ところがだんだん通俗化されて，わけの分らないものに転落していきますから。転落した後で，あれもこれもミックスしてしまうのではなくて，初期の出発点にあったものを大事に，そこを大事にして私たちは考えていく必要があるということです。

それでは，ウアラスさんのきょうの講演のことについてですが，まず 39 ページ(本記録集 46 頁)の左の列，あるいは 40 ページ(本記録集 47 頁)の真ん中から下に書いてあります通り，私の印象は，ウアラス先生の授業の子ども作品に，子どもたちの夢，想像力，そして表現活動の楽しさを感じましたというのが，私の印象です。

ところで翻りまして，ドイツのことを見るときに非常に大事なのですけれども，ドイツの芸術教育も，芸術教育学もいま危機にあります。私たちは，たくさん多くのことをフランスからも学びましたし，アメリカからも学び，ドイツからも学んできました。

でも現状としては，かつての 1980 年代ごろのドイツの芸術教育学の状況とはまた違う状況があるわけです。まずそのことから触れたいと思います。それに関連して，2014 年と 2016 年に，私はノルトライン＝ヴェストファーレン州とドレスデン・ギムナジウムの教育界を科研の調査の一環で見に行ってきたのですが，

そのことに触れたいと思います。

ノルトライン＝ヴェストファーレン州というのは，湯川先生が報告されましたデュッセルドルフ芸術アカデミーのあるところで，そこの出身者がギムナジウムと中等学校の素晴らしい授業をしているだけではなくて，初等学校の芸術教育の教師をしています。非常に豊かな蓄積をしてきたところです。

ところが，何が原因か単純化はできないのですけれども，非常に深刻な危機状況を発見しました。ここから翻訳をお願いします。2014 年と 2016 年に，私はノルトライン＝ヴェストファーレン州に行って，ギムナジウムでしたけれども芸術教育を見ました。そこで見たのは，芸術教育の困難性，そこにインクルーシヴ教育も絡んでいる現実です。かなり深刻な状況でした。ただ，大事なことは年配の先生たちに力量が蓄積されているということでした。

（ウアラス氏へ通訳）

鈴木：次に，今度は冊子の 38 頁(本記録集 45 頁)，あるいはこの配付資料の大きめの文字の２頁をご覧ください。同時にドレスデンを見ました。ドレスデンは経済的，社会的には非常に厳しい状況にあるのですけれども，芸術教育においてはベーシックなことを支えにして，理想形とは言えないと思いますが，好感を持てるような芸術教育がありました。そこに見たものは，表現教育のベーシックな骨格を学んできている先生たち，芸術教育のフレキシブルな実践を組み立てようとしている人たちの芸術教育がありました。

（ウアラス氏へ通訳）

鈴木：昔ならば，私は社会主義が好きだといったかたちで，ドレスデンはすごいというようなばかなことを考えたものなのですけれども，そうではなくてもっとフェアに，是々非々で見た場合にそのようなことが見えてきたのです。

大事なことは，芸術教育のベーシックな骨格を教師が学んできている。しかも，20 代で学んできたことを 30 代，40 代で豊かに育んでいくということ。そして，その結果なのでしょうけれども，芸術教育をフレキシブルに組み立てるということ。そのことが非常に大事だと思うのです。

今日のウアラス先生の授業を見せていただいたときに，非常にエネルギッシュな授業だと思いました。何か授業の組み立てが複雑だとか，特異なテクニックを使っているという話ではなくて，エネルギッシュな教師でないとこのような授業は組み立てられないと感じました。

簡単にはできないけれども，それは昔の日本でも多くの人たちが頑張っていた，今でも頑張っている人がいると思いますが，頑張っていた表現教育の姿です。これが私の頭をよぎったときに，ウアラス先生の提起している問題というのは次のようなことなのではないかと考えました。

（ウアラス氏へ通訳）

鈴木：結局，表現教育というものをフレキシブルに把握した上で，子どもたち自身が自分の表現を発見することを糸口に，どのように連鎖を重ねながら表現というものを学び，きょうのウアラス先生の言葉では「自分自身を発見していく」という。それがいきなりできるわけではなくて，ほんの一歩しかできないわけでしょうけれども，その一歩一歩を重ねていくという表現教育の始まりの断片を見せてくれたのだと思いました。

これはおそらく単に芸術教育や芸術教育学の話ではなく，教員養成に対してのウアラス先生が挑戦しようとしていることなのかと，私は同じ教員養成をしている一人として感じた次第です。以上が質問です。

ウアラス：まずは，8 年ぶりにお会いできて，また話し合うチャンスができて大変うれしく思っています。鈴木先生が，実際にノルトライン＝ヴェストファーレン州とドレスデンでの芸術教育の状況を，ある種のショックを持って体験されたお話をしてくださいました。私は全部の州を知っているわけではありませんが，先ほども言いましたように，州ごとに違う教育状況がドイツではありますので，非常に多様な現状があるのは当然なわけです。

登壇者そろってのシンポジウムの様子

しかも，それも，いつもいい状況にあるわけではありません。特に，ドレスデンについてポジティブなご報告があったわけですけれども，ドレスデンはやはり経済的にも社会的にも非常に困難を抱えている地域の一つであります。

そして，ドレスデンに限らずいまドイツが，そしてドイツだけに限らずヨーロッパも，そしておそらく日本もそうだと思いますが，非常に難しい政治的な問題を抱えていると思います。具体的には，テロや難民問題であるとか，これが私たちの社会を混乱と不安に陥れている現状があります。

それは置いておくとしても，先生がおっしゃった情熱ということですけれども，そのことを概観してくださってありがたいと思います。もちろん私は情熱をもって自分のプロジェクトを実施していますけれども，私がやっていることは，このアート・プロジェクトだけではありません。むしろ，地道な技法を教授するというようなこともやっているわけです。

グラフィック印刷の仕方であるとか，そのような具体的なことを教える作業も，私の教授する内容の一角を占めております。ですが，そのベーシックな知識やベーシックな技能というものの重要性を先生が大きく取り上げてくれましたけれども，それはもちろん重要です。そして，例えば私が自分の大学で行っている教員養成の中では，先生がおっしゃったような基礎的な骨格をもちろん，絵を描くなどのいろいろな芸術的な行為の骨格を学ぶことと同時に，最低１人二つのプロジェクトを仕上げるという課題があります。

このプロジェクトで，先生がおっしゃった骨格学を実際に試して実践されていくわけです。そして，学生たちは１学期間を教育実習に使うのですけれども，その際に行われるのもプロジェクトであります。そのプロジェクトは多くの場合いい結果を生んでおり，そこでプロジェクトを進めるにあたって，学生たちはやはりベーシックな知識と技能の重要性を，そこでまた再認識するというかたちになっています。よろしいでしょうか。

鈴木：はい。

ウアラス：そして，鈴木先生が始めてくださったお話に，私自身が考えたことも少し付け足したいと思います。いま私どもは大学である分野融合的な試みを行っています。この分野融合的な試みの一つの例は，「生物学と芸術」という組み合わせで行いました。その時に具体的な題材として取り上げたのは，庭であります。この題材を，生物学からどうアプローチするのか，芸術はどのようにアプローチするのかということで行いました。

そして，いま終わったゼメスターでは，私は数学を選んでいます。具体的な題材としては，正方形を選んでいます。もちろん正方形は数学的な，あるいは幾何学的な対象ではありますが，芸術にとってもまた興味深い対象であります。この融合によって，今まで自分たちの専門分野で見ていた視野が拡張されるというか，打ち破られるというか，そのような効果が生まれて非常に興味深いと思うのです。

他教科からの刺激を得ることで，なおかつ自分の専門分野もポジティブな影響を受けるという，この分野融合的な試みというのを１学期丸々使ってやっています。

鈴木：質問ではないのですけれども，いまのお話を聞いていて思い出したのは，ウアラスさんの話の中で，子どもたちの興味という単語を何度も繰り返されていたので，キーワードなのだと思いました。そういった意味では，先生自身の教育実践の試みは「paedagogische Bemuehungen（教育的努力・教育的取り組み）」ですね。

鈴木：英語で言えばチャレンジングワーク，これかと思って聞かせていただきました。これが，やはりお互いにとって大切な出発点でありゴールなのでしょうか。ありがとうございます。

■16：40–17:55
フロアーからの質問に対する応答，シンポジストのまとめの話，事務連絡

宇田：先生，よろしいでしょうか。そうしましたら，まだ佐藤先生がお着きになっていないので，逆に少し時間にゆとりをもって構えることができています。それで，いったん，せっかくこれだけ長い間，皆さん聞いていただきましたので，会場の方から質問していただき。急にはなかなか出にくい場合には，また岡田先生，辻先生の方から，先ほど少し中途半端になったところもあるかと思いますので言っていただければ。それからシンポジストの方，続きの会話をしていただいたらと思います。

それでは，いったん会場のほうに振ろうと思うのですけれども，何かありましたら手を挙げていただいて。それでご所属，あるいはお仕事を言っていただいて，

できるだけシンプルに質問していただけたらと思います。せっかくですので，いかがでしょうか。

(暫く待ったが，フロアーからは挙手がなかった。)

では，少しためておいていただいて，これだというときに手を挙げていただくということにいたします。では，岡田先生，先ほどの続きでありましたね。続きのところで未完成のところがあったかと思いますので。

岡田：続きというよりも，いいですか。

宇田：いいです。まだ時間がありますので。

岡田：続きというよりも，先ほど福本先生が鑑賞のことをたくさん質問されていて，私も今日，鑑賞のことをお聞きして「あ，これだ」と思ったのです。その辺りで，福本先生の三つめの質問に答えられていなかったと思うので，そこが聞きたいです。

宇田：それを具体的に言ってください。

岡田：作家の価値観や知識の鑑賞の場面を，どのようにそのプロジェクトの中でされていますかというような質問だったと思うのですが。

松坂(通訳)：芸術鑑賞ですね。すみません。もう一度きちんと文章にしてくださいますか。

岡田：すみません，日本語になっていなかったですね。工事現場のプロジェクトの中で，現代アーティストの作品を見せられていました。そこからまた作品作りになっていたのですけれども，その辺の鑑賞を入れる意味をもう一度お聞かせください。

ウアラス：私がプロジェクトで子どもたちに作家の作品を見せるということは，子どもたちが世界を知るべきだという意味で重要だと考えているからです。その際，私は，紹介したような現代作家だけでなく古典作品を紹介することも大事だと思っています。例えば，子どもたちが自分のプロジェクトで，何かタワーを建てるようなプロジェクトを持っていたとすると，そのとき私は例えばピサの斜塔であったりバベルの塔であったり，そういう歴史的な題材を見ることは非常に重要だと思っています。

一方で，現代作家の作品を知ることが非常に重要だと思うのにはいろいろなわけがあります。現代作家の作品に使われている材料は，子どもたちがいま授業で使うような材料とよく似ている点もあります。例えば，紹介したアントニ・タピエスは 200 年ぐらい前ならあのような土を使って作品を作るというようなことはなかった。これはここ数十年の傾向であると思います。

そういう意味で，材料の面からも興味を起こさせやすいということがあり，私は子どもたちに現代作家の作品への「寛容さ・トレランス tolerance」と「関心を掘り起こすこと・インタレスト interest」が重要だと思ってやってきました。

そしてもう一つは，現代作家が取り扱うテーマであります。やはり現代が抱える問題をテーマにしていることが多く，そういう作品を見たときに子どもたちがその作品を腑に落ちると言いますか，後から実感できるようなことがあるからです。

現代に生きる者が抱える問題を，芸術を窓口として意識することにつながると思います。その意味でアート，芸術というのは，先生は「サイズモグラフィ seismology(地震学)」だとおっしゃったのです。現代の地震計の描く図です。そのような動きを表すものが芸術であると言っておられました。

宇田：岡田先生に少し付け加えて，ウアラスさんに質問します。そのような作家たちの作品を見せたときの反応はどうだったかをお聞きしたいです。おそらく，子どもが関心を持って鑑賞作品を受け入れられるのは，ウアラスさんの場合はプロジェクトでその作家と関連する内容をやっているので，当然，「私たちも同じようなことをしているのだ」「世界の作家とつながるのだ」という実感があるのではないかと思うのですが，いかがでしょうか。

ウアラス：私がプロジェクトの中で子どもたちに紹介している芸術作品というのは，プロジェクトの最初からプログラムしていないのです。子どもたちの反応を見つつ，このような作品を見せたらどうだろうと思って紹介してきているわけです。ですので，プロジェクトをやろうという教師にはそれが臨機応変にできる能力は必要だろうと思います。

そして，特に現代美術の場合に言えると思うのですけれども，多くの場合は非常に異質なものや変わっているもの，少し，ちんけだという印象を持って美術館などで鑑賞することが多いと思うのですけれども，それも必要なことではないかと思っています。

ただ，私が重要だと思っているのは，提示されている彫刻作品を展示台から引き下ろすということです。つまり，高尚なものとして奉るだけではない。もっと身近に引き下ろしてきて，いろいろと鑑賞するということ。そういうことに臆さないような子どもであるべきだと考えています。

それができるように，ある意味非常にセンシティブに芸術作品に触れさせるようにしたいと思います。その際，それが傑作や大作である必要はなく，むしろ当

たり前のものとして世の中で経験する。そしてそれが，子どもたちの発達プロセスにいい影響を与えるのではないかと考えています。

宇田：ありがとうございました。いかがでしょうか。だんだんといろいろなものが見えてまいりましたが，よろしいでしょうか。手が挙がりました。では，よろしくお願いします。

宮崎 浩(西宮市仁川学院小学校)：西宮市仁川学院小学校の宮崎浩と申します。きょう紹介していただいたプロジェクトというのは，生の工事現場というのが子どもたちの目の前に見えて，本物の現場があるというインパクトは，相当子どもを触発したという事実があると思います。ただ，一方で，学校というのはやはり危険というものはあまりないので，そういった非常にインパクトがあるような場所や，学校の外に行けるというのは授業の中ではなかなか行けないとなったときに，そこまで空間としては面白くもないかもしれない教室でできる実践はどういうものがあるのかということを考えながら聞いていました。

そこで，ウアラスさんの生徒でしょうか，教育実習に行く学生さんにアート・プロジェクトをいくつかやらせるというものがありましたけれども，その学生が教育実習先で行なっているアート・プロジェクト的なものというのは，具体的にはどのようなものがあるのかお聞きしたいと思いました。よろしくお願いします。

ウアラス：質問ありがとうございました。私の学生の例を紹介したいと思います。前学期，私の学生たちが小学校 3，4 年生を対象に同じようなアート・プロジェクトを実施しました。先ほど，学校からは危険ができるだけ排除されていて，工事現場のようなスペクタクルな題材というのはなかなか一般的に見つけるのは難しいということでしたが，そのときに彼らが選んだテーマというのがドイツ語で「ダーツヴィシエン dazwischen」というものです。「何かと何かの間」という概念なのですけれども，それをテーマにしています。

つまり，非常に範囲が広いわけです。それで学生は子どもたちと一緒に，一体どのような物と物との間があるのだろうとリサーチしたのです。例えばそれは，「ある生徒ともう 1 人生徒の間」に何があるのか。その間にどのような力が働いているのかということでもいいわけなのです。また，「夜と昼」の間。つまり夜明けだとか夕焼けだとかいうのは，一体どのような現象なのだろうかというようなことを考えたのです。そこからまた出発して，フクロウなどのような夜行性の動物がどのように動くのだろうかということも考えました。

やはり「間」というテーマでは，別に具体的な場所には縛られていないのです。そのようにしてオープンなテーマを選ぶということがやれることだろうと思います。つまりそのオープンなテーマを選ぶには，自分もオープンな目を持っていないといけなくて，工事現場がないからできないということではなく，このようなものもこう扱えば面白いテーマになるということがあるわけです。

その例は私のウェブサイトに紹介されているいろいろなプロジェクトをご覧いただければ分かるかと思います。よろしいでしょうか。

宮崎：はい，ありがとうございます。

宇田：これがウェブサイトなので，また後でご覧になってください。

宮崎：はい。

宇田：では，せっかく出てきましたので，ほかにフロアから。はい，手が挙がってきたので順番にいきましょう。だんだんいろいろなものが見えてまいりました。はい，ではお願いします。

森芳功(徳島県立近代美術館)：徳島県立近代美術館で学芸員をしております森芳功と申します。ウアラス先生のお考えの背景について少しお聞かせください。20 世紀のヨーロッパには鈴木幹雄先生が研究されているバウハウスのように，自己探求の過程とプロセス性を重視する芸術教育の思想があったと思うのですが，ウアラス先生の実践は，その伝統を創造的に受け継ぐものだと感じました。

先生のご実践は，子どもたちの活動が変化の中でも柔軟に対応できることや，選びとる過程を重視されていますけれども，そこに至った考え方をもう少し伺いたいと思いました。また，ヨーゼフ・ボイスのカオスのこと，州の教育計画のことも伺いましたが，それ以外に重要な要素はあったのでしょうか。あるいは，先生のいまのお考えに至った過程などをお聞かせいただ

けたらありがたいと思います。

ウアラス：大変興味深いご質問をお寄せくださり，ありがとうございました。私のこのような方法にある背景についてお尋ねいただきました。大きくまとめて三つ申し上げることができると思います。

改革教育学ということが第 1 番目です。これは 20 世紀の初頭に提唱されたもので, もう 100 年以上も前になるものですが, だいたい 1905 年から 1910 年の間に，この改革教育学についての本がたくさん書かれました。非常にその影響力があったにも関わらず，そこで提唱されていることが実践されることはほとんどなかったと言っていいと思います。手短に言えば，この思想で言われていることは，子どもの芸術というものを評価するということだったと思います。

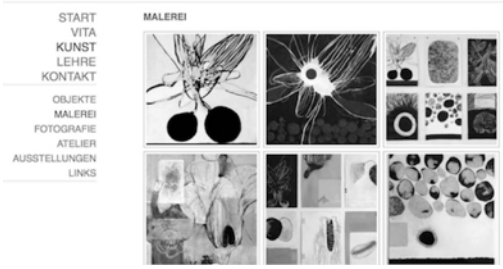
そして，すでに言ってくださいましたが，2 番目としてヨーゼフ・ボイスは欠かせないと思っています。私のやろうと思っていることの中心にいるのが，このヨーゼフ・ボイスだと言えると思います。彼は，芸術の概念を拡張したと思います。そして,「社会彫刻（Soziale Plastik）」という概念を打ち立てました。この概念の中で彼が言っていることは，「誰でもアーティストである Jeder Mensch ist ein Kuenstler」[⑩]ということなのだそうです。そして，どのような人の中にも何かを形成するという可能性がある。そして，それは社会を形成していくことにつながっていくという考え方で，私は非常に共感しております。

三つ目が，私のプレゼンの中でも紹介しました「レーベンスクンスト(Lebenskunst)，生きる技・生きる術の哲学」であります。これを提唱しているのがヴィルフェルム・シュミット(Wilhelm Schmid 独 1953-)[⑪]という哲学者で，この方が芸術と芸術的行為のプロセス，そして生活を形成していくことの間にある有機的な関係を説きました。

彼の文章をたくさん読んで，私は現在の考え方に至りました。私の考えは，芸術教育は画家や彫刻家を生むことが主眼なのではなく，結局，芸術教育を通して子どもたちが自分の人生，生というものを自分で形成していく能力を発見することだと思い至ったわけです。答えになっていますでしょうか。

森：よく分りました。ありがとうございました。

ウアラス：私のもう一つの大きなソースになっているものは，私自身の芸術活動です。私は教えるという仕事もしている関係上，フリーアーティストとしての時間はそれほど沢山あるわけではありませんが，いまお見せしているのは私のホームページで，私が描いた絵や私が作ったインスタレーションであります。この活動を通して，私はダイアログ・プロセスとでも言えるようなものに思い至ったのです。



ウアラス氏 HP　http://www.mario-urlass.de/kunst/malerei/

つまり，私が自分で作品を制作しているとき，私がドミナント(支配的)なものではなくて作品のほうから私に何か要求してくるのです。そのように，いま自分が制作している作品との間の対話(ダイアログ)というもの，この実感，この体験がやはり生徒たちとのプロジェクトに使われていると思っているわけです。

授業もまた，対話的なプロセスであるというふうに言えると思います。ですから，オープンであれと私は何度も言っていたわけです。

ウアラス：私の作品の宣伝をしようと思っているわけではないのですけれども, いま私のホームページ, ウェブサイト上のいろいろなコーナーのところで紹介しているのですけれども，LEHRE とあるのは，業績などの紹介になっています。

---

⑩「レクチャア 芸術と社会 1984.5.30(三島憲一訳)」西武美術館・WAVE・SPN『1984 Joseph Beuys in Japan ドキュメント ヨーゼフ・ボイス・TVプリンター・マガジン』ペヨトル工房,1984, ,pp.33−57など参照。

⑪ Wilhelm Schmid, Philosophie der Lebenskunst. Eine Grundlegung. Suhrkamp-TB Wissenschaft 1385, Frankfurt am Main 1998, ISBN 3-518-28985-3.

ウアラス：LEHRE の中の SCHULPROJEKTE というコーナーで，私が今までやってきた学校でのアート・プロジェクトを紹介していますが，それに今やっているものを加えようと思っています。そしてまた，著作活動もここにあてています。その中には，アート・プロジェクトを扱ったものもいくつかあります。そしてその著作は，ウェブ上でも読めるように一部なっております。残念ながら，ドイツ語だけなのだそうですけれども，翻訳ツールもあるでしょうから，だいたいのことが分かるのではないかと思います。

宇田：ありがとうございました。では，次は一番上の方。

羽太 広海(奈良学園大学)：よろしくお願いします。奈良学園大学でメディア・アートを教えております，羽太と申します。何点かお伺いしたいことがあります。ウアラスさんは先ほどのお話のなかでアート・プロジェクトは，同じ教員や研究者仲間に発表するためにやっているのではなく，子どもが一番喜んでいるところが，そのお母さんに熱中していると間接的に伝われば教育的役目を果たしているというか，教師としても一番重要な役割であるとのことでした。その一方，グラフィックを教えたり，大学で高等教育に従事しているとのことですが，技術のことも重要ですし，着想やアイデアといった発想と技術が芸術の両輪だと思います。

僕もコンピューターグラフィックスやデザインプログラミングを教えている関係上どうしてもテクニックを習得させたいのですけれども，やはり最終的に作るものはアイデアなので，その人の着想であったり，それを出してもらったほうが採点する教員としては一番うれしい。そして技術もよければいいと思っています。

お母さんたちはどうしても PISA⑫型能力というか，読み書きそろばんを要求するので，そのギャップと，発想と工夫がなかなか埋まらない。教員と生徒と親へつながっていかないというのが，常に教師のジレンマだと思うのです。それを，先生は子どもが喜んでいる姿が親に伝わるのが一番いいということだったのですけれども，それを関係性だけで任せておくのがいいのか，そこまで州や国が関与するのがいいのかというのは，僕は矛盾も感じるのですけれども，ドイツの日本の違いもあると思いますが，先生はどのように着想やアイデアという教えにくいものを文章化しているのか。伝えていくのが一番大事な部分になるので，お聞きしたいと思います。

宇田：少し複合的な質問のですけれども，着想やアイデアというなかなか伝わりにくいところを，どう伝えていっているのかということだと思うのですけれども。

ウアラス：まず，非常に重要な点についてご質問いただきありがとうございました。着想やアイデアというものは，芸術作品に限らず社会全体においても非常に大事なものだと思います。そのようなアイデアがなければ，何の進展も進歩も起きないからであります。

私たちの行なっているアート・プロジェクトでは，最後にそのテーマを振り返って，一緒にやってきた実験やリサーチ，材料や練習のこと，何に夢中になったかということを振り返るわけです。子どもたちが着想を持つのは，いきなり独自のアイデアを開発するということは難しいです。

したがって，私たちができることは段階を追って，その準備をしてあげることなのです。そう言うと筋書きを作っているように聞こえるかもしれませんが，そうではなくて，可能性を与えてあげるということだと思うのです。先ほど，宇田先生が示してくださいましたけれども，ひまわりのプロジェクトで 25 枚の全く同じ絵が並んでいましたが，あれは全く創造性が閉じられた状況で描かれていることを示しているわけです。あのようにならないために，子どもたちが段階を追って，自分たちの着想あるいはアイデアに到達するような可能性を提供することが，私たち教師の役目かと思います。

その際に重要なのは，インプットとアウトプットの関係性にとらわれないことです。教師は楽なので，こうインプットしたらこうアウトプットで出てくるということにとらわれると，全てが予測可能性の中で起きてしまって，安心ではあるけれども，先ほどの画一的なひまわりの絵のようになってしまうと思います。

---

⑫OECD(Organisation for Economic Co-operation and Development 経済協力開発機構)が進めている PISA(Programme for International Student Assessment)と呼ばれる国際的な学習到達度に関する調査に日本も参加しており国立教育政策研究所が調査の実施を担当。PISA 調査では 15 歳児を対象に読解力，数学的リテラシー,科学的リテラシーの三分野について３年ごとに本調査を実施している。2016.8.1 確認
http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/

ですから教師は，常に挑発を受けていないといけないと思うのです。そのようにならないような可能性を準備してやり，子どもが自分でその自分のアイデアに到達するようにしてやる。少し抽象的になりましたが，そういう答えでよろしいでしょうか。

羽太：どうもありがとうございました。

宇田：まだまだいろいろとお聞きしたい，これからだと思うのですけれども，そろそろまとめに入っていきたいと思います。もう少し質問していただこうと思ったのですけれども，次のところはもうドイツ語に訳さないのですけれども，簡単にきょうの感想を２分程度でそれぞれ言っていただいて，一応しめたいと思います。では，辻さんからまとめでお願いします。

辻：今日は長丁場ありがとうございました，ウアラス先生のコップの水を見ると空っぽなので，相当たくさんお話しになったのだなと感じました。また翻訳の方も大変だったと思います。

さて感想になるのですが，ウアラス先生の発表で，子どもたちが工事現場の土を，大きさや色で分類している画像や，四角をつなげて図形を展開する画像などがあったと思います。この辺の活動は生活化や算数，総合科目などともつながる美術の領域横断的な側面があらわれていたように思いました。また一方で美術の他教科にはない優位性を考えたときに，子どもたちが土を分けた後に，その土を使って原始美術のような絵をとてもよい笑顔で描いており，この辺に美術の優位性があるように思いました。

つまり子どもたちが素材に触れ，社会に触れ，新しい経験をしたときに，形や色，素材でなにかを表したいのではないか。このような表現する，表すというのが美術教育の根拠の一つになっているのではないかという感想を抱きました。

もう一つ鑑賞の話が出ていたのですが，ウアラス先生のプロジェクトの活動の途中に，芸術作品を見て，自身の作品を振り返り，相対化するリフレクションの活動があったと思います。たとえば芸術作品で，実物大の家の床から根っこが生えているものをクレーンで吊るして展示した芸術作品の画像を鑑賞するなど。

あのようなものは普段の生活ではなかなか見られないものですが，芸術作品では既成の価値観を広げるようなものが多いので，普段の価値観とは異なるものを見る，触れる，そして概念を広げていくという鑑賞活動は，ほかの教科にはない，美術教育のもう一つの正当性や根拠を担保するものになるのではないかと思いました。ありがとうございました。

宇田：はい，ありがとうございました。では，福本先生，お願いします。

福本：はい。ウアラス先生，ありがとうございました。私のほうは，教員養成としての課題というものを改めて感じたように思います。例えばこれを見て，授業化を考えようとすると，プロジェクト型学習の成立要件というものが非常に難しいということになります。まず，少人数対応だからできるのではないか，また材料を用意するのが非常に大変だというようなこと，評価はどうするのかという，「造形遊び」と共通するような疑念が出てくるというふうに思いました。

一方で，こういったことを養成課程でどのような資質・能力を高めていくのかといったときに，先ほども出てきました鑑賞と表現をどのようにコネクトしていくのかという美術的素養の問題。それから，ウアラス先生のスライドにもありましたけれども，英語では「オスシレーション oscillation」というように言われている振り子です。いろいろな対立的な要素を，どのようにバランスをとっていくのか。柔軟な授業構成，授業編成の力量と言ってしまえばいいのかもしれませんが，それをどのようにして身につければいいのかということ。

それから，先ほどの話にもあったように，理論的な背景というか，そのようなものをベースにしながら理論と実践の融合をどのように図っていくのか。そのような育成の課題ということも改めて認識して，そこから大学で養成する実践的な教育というものをやはり考えていかなければいけないし，そのような養成を行っていきたいと改めて思いました。以上です。

宇田：はい，ありがとうございました。湯川先生，お願いします。

湯川：今回，冊子のほうに三つほど質問事項を書いておいたのですけれども，二つぐらいで終わってしまっていたのです。最初に質問したかったのは美術科というものが，学校教育の中でどのように考えられているのかというところは，ウアラス先生の講演のときに自己認識と世界認識の統合というようなことをおっしゃられていて，それを美術科の目標とすると言われたときの教育プログラムを聞き，ある程度はそのようなこともあるのかと思いながら，少し理解が深まったという感じがしました。

ウアラス先生の実践を見ながら，芸術活動を通しての人間教育みたいなものが，非常に情熱を持ってされ

ているということが印象深かったと思います。以上です。

宇田：ありがとうございました。鈴木先生，お願いします。

鈴木：日本の美術教育にとっても，教員養成と教員教育の水準をどうするかというのは難しい課題だと思います。私は教員養成の政策立案者の立場に立ったことが~~一度も~~ありませんから，大所高所から考えたわけではないのですけれども，かなり危機的な状況です。国立大学だけで養成してきたわけではなく，私学の美術大学等も含めていろいろな支え合いや協力で養ってきたのです。国立の文脈で言いますと中等面が弱体化したときには初等面の教師たちの力量が低下していって，初等面の力量が低下したときには中等面のところも弱体化するという，表面だけを見ると別々の世界に見えるのですけれども世の中は連動している。

私たちが反省しなくてはいけないというのも，賛成したわけではないけれども，こうすることができなかったということで言うと，総合学習のことや生活科が入ってきたときに，そこの研究会には何百人単位ぐらいの人がいるなかで，図工美術の研究科は小人数しかいないと，取り組んでいる研究校先生方が嘆いているような現状がありまして，私たちが全て新しい教科が救済策だと考えたわけではないのですけれども，それにある程度の責任を引き受けざるを得なかった面もあるのです。

そういうことも含めて，表現教科の教師の力量を，具体的に分かりやすく言いましたら，先ほど何回かウアラス先生のおっしゃった，20 代 30 代前半で育てるべき力をつけなかったら，あるいはそれをさらに 30 代で発展させることをしなかったら，結局，中堅教員が育ってこないということがてきめんに出てきています。

2008 年に花篤先生とそのお弟子さん，それから福本先生も頑張って In SEA の世界大会を大阪でしましたけれども，その際に年配の先生たちと何度も話をしたのですけれども，戦後の美術教師の貯金によって今は動いているけれども，これがいつまで動くのかという話をしたことがあるのです。その貯金もそろそろ枯渇してきた域を迎えて，どうやってこれを維持していくのかが難しい課題になっています，

でも，そうは言いながらも子どもたち，特に思春期になって心の整理がつかなくなる前に，子どもたちの情感的な，表現的なところを育ててあげたり，育んであげないと日本の次世代の形成というものが難しくなってくると心配しています。

でも，この問題はドイツでも同じで，付け加えますと，ウアラス先生がおられるバーデン＝ヴェルテンベルク州を事例に 2000 年代の後半の国立政策研究所のカリキュラム調査に関わったことがあります。そのときにカリキュラムを訳して驚いたのは，総合大学出身の，専門性の疎い教育学者が初等教科のカリキュラム編成をしているものですから，この結末は相当ひどいことになると気が付いたことがあります。

でもその後，追跡調査を致した訳ではないので，全体像は把握できていません。でもウアラス先生もバーデン＝ヴェルテンベルク州の中で，かなりの逆風のような風も受けながら，孤軍奮闘しているのかなと思う次第です。

いずれにしても，表現教科は一般の人には表層の流れしか見えませんけれども，図工・美術科教育もそうかもしれませんが，表層の下にもたくさんの地下水量が流れているということが読めないと，子どもたちの表現活動をしながら何を発見していくかということや，自分の財産を使っていくか，次の一歩の財産をどう変えていくなどといったことが見えません。

これは結局，私たちも含めて表現教科にかかる教職に就いている人たち，あるいはアトリエ等で，あるいは画塾等で教えている先生たちも含めて支えていかないと，崩壊したら元へ戻すのは何十年も掛かるなと複雑な心境です。それも含めて，私はもうじき退職しますからどうしましょうという感じです。

そういった意味で，ウアラス先生のことは厳しくというか，日本の立場からなどとえらそうに言いませんでしたのは，やはり「お前がやってみろよ」と言われたときに大変な仕事なのです。一つの教材の単元の授業をすることも大変ですけれども，その連鎖行動を作っていくのは大変なことです。でも，これができるというのは，その人のエネルギーと体力とパッションなのです。これが美術文化教師の伝統的な十八番だったのですけれども，その十八番の周りが少し腐ってきてはしないか心配しています。失礼いたしました。

宇田：ありがとうございました。では，岡田先生短めに，感想だけお願いします。

岡田：鈴木先生がおっしゃったみたいに，パッションとエネルギーのあるウアラス先生のプロジェクトを聞いて，私ももう退職した身なのですけれども，やはり大学の先生，小学校，中学校，幼稚園の人みんなと，

地域の工事現場の人も含めて，みんなであの様なことをすると，本当に子どもが生き生きして「もっとやりたい，もっとやりたい」となるので，ぜひ学校現場の先生方と一緒に，大学の先生も一緒にみんなでこのようなことを広めていきたいと思いました。本当にウアラス先生ありがとうございました。

宇田： Hi Mario, please tell us your comment about this forum.

ウアラス：今日ここでこのように皆さんにお話しさせていただく機会を設けてくださったことに感謝しています。特に宇田先生は，今回のこのリサーチフォーラム開催に非常にご尽力いただきました。素晴らしいご準備で，素晴らしいオーガナイズで，ドイツではこうはいかないと思っています。本当にありがとうございます。

そして今日の登壇者の先生方，お話は冊子上に英語に翻訳してくださいましたので，たくさんの刺激を得ることができました。貴重なお話をありがとうございます。それから聴衆の皆さま，皆さまに私のやっている仕事の内容を紹介できたことは大変光栄でした。そして，熱心に聞いていただき，多くの質問も寄せてくださいました。そして，私は皆さんの質問から多くのことを学び，視点を発見できたことが非常にうれしいことでありました。

ドイツと日本は 8000km も離れているのですけれども，この大きな距離を挟んで，私たち同じ仕事に携わる者が目的と問題意識を共有しているということを改めて強く思ったことでありました。

私たちは美術科教師として，ますます厳しくなっていくこの社会の中で，どのような貢献ができるのだろうかと考えます。そして，きょう私たちは，自由で寛大で開かれた社会を実現するために，どのような貢献が美術教師としてできるのか。そして，芸術を通して子どもたちが自分自身を発見し，自分の生き方を形成していけるようにするにはどのようにすればいいのかということを考え続けていくのだろうと思います

今回ご紹介した「工事現場」というアート・プロジェクトなのですが，少し申し上げましたけれども，この工事現場というのは非常に暗喩に富んでいると思うのです。つまり，日独で同じ問題を抱えている私たちのなしていくこと，営為ですね。そして，それらは全て建設途中なのです。終わりなき過程の中にある。そして，私たちがここで行なった対話というものも，これからやはり終わることなく続けていきたいものだというように思っています。

どのような困難に打ちひしがれていようとも，その建設途上であるということを胸に抱いて皆さんと一緒に頑張っていきたいと思います。（拍手）

宇田：きょうはわざわざ韓国からおいでの皆さん，まだおられますか。もうお帰りでしょうか。お帰りですか，すみません。韓国の方は，おそらく来年の 2017 年 8 月に In SEA の韓国大邱(テグ)大会[13]というのがあって，それもあって来られたのではないかと思います。これからの国際交流ということで，またお出かけいただいたらと思います。

それでは長時間やってまいりましたけれども，ウアラスさんをはじめプレゼンターの方々，そして何よりもご苦労された通訳の松坂さん，そしてこの長時間お付き合いいただきました全員のために拍手でしめたいと思います。どうもお疲れさまでした。（拍手）

では，皆さん，冊子に参加者の感想用紙というのがありますので，参考にさせていただきたいので，この辺りで学生アシスタントの彼女に集めてもらうことにしたいと思います。それから，記録冊子のほうをまた送らせていただきますので，どうぞよろしくお願いいたします。少し懇親交流会の前にこの辺りで交流を持たれたい方は，英語はいけますので個人的にお話しを聞いていただければと思います。

それでは，これで終わりにしたいと思います。本日はありがとうございました。（拍手）

---

⑬35th World Congress of the Int'l Society for Education Through Art : InSEA, August 7 (Mon.) -11 (Fri.), 2017, EXCO(Exhibition and Convention Center),Daegu,Korea
http://www.insea2017.org/index.php　2016.9.1 確認。

参加者の声

事後の感想・要望

実施日をマリオ・ウアラス教授の日本滞在日程にあわせて設定したため，ちょうど，現職教員向けの夏の研修・研究会日程と重なりました。このため，参加者は 65 名に留まりましたが，関西地方のほか，埼玉，東京，群馬，富山，徳島，岡山，大分など全国からお集まりいただきました。さらに韓国からの参加者も２名おられ, 結果的に国際的なフォーラムとなりました。

また，「プロジェクト型の活動」というテーマを掲げて広報したこともあってか，参加者の中には，市役所や公的機関で行政や国際交流に携わる方，文化研究者，美術館学芸員，地域のアート教室主宰の方など学校教育以外の参加者がありました。

これらの参加者に終了後に，「感想・要望」をいただきましたので，ここに掲載致します。

保育園 保育士

マリオ・ウアラス教授の話を聞いて，色んな所に教材となるものがころがっているのだなと思った。

小学校教諭

ウアラス先生の実践がとても素晴らしかった。
子どもの興味・関心からプロジェクトをスタートさせていくには, 教師の力量が相当問われるものだと思う。
美術教師として，現代アート(古典アート含め)，美術の知識がないと鑑賞教材も探し出せないだろうなと思います。
子どもの思いがどんどん広がり，ふくらむもの，自由に考えて，そして自分が決めて創り上げるもの，テーマの選び方と教師の器の大きさ，これが大事だなと思いました。

小学校教諭・大学院生

立派な先生方は，過去の御自分の研究をふまえて，質問や意見・感想を述べられるので，一般人的には，ドイツ語翻訳時間が途中に挟まって更に難解なものでした。
マリオ先生の実践の具体が，ひまわりプロジェクト以外にも，「工事現場」「何かと何かの間」「55 セント」等　知ることができたことが何よりの収穫でした。ありがとうございました。

中学校教諭

ドイツの非常に刺激的な，かつ興味深い実践をきくことができ感謝しています。
これからの美術教育にどう生かしていくのか課題意識をもつことができました。

特別支援学校高等部教諭

小中はまだ美術があって連携できる気がしますが，高校の美術はどういう取り組みできますか。
機会があれば。

高校教諭

プロジェクト型といった学習の中でコンピテンシーベースの学習可能性を感じました。他の学問領域への生徒の関心も，この学びにおいては同時に大切にしていきたい内容だと思いました。
ありがとうございました。

高校教諭

今日のフォーラムに参加させていただいてありがとうございました。建設途中の段階での美術教育が，これからもっと生き生きと子どもの生活に結びついていくことを強く思いました。
ありがとうございました。

短大教員

本日のウアラス先生のお話は，芸術の可能性を自信を持ってプロジェクト学習に落とし込む，すなわち，芸術というのは初めから決まっているものではなくて，価値や表現がゆれ動く可逆的なのものであり，そのつど考えることで鑑賞，さらには，相互批評的な面を入れることでプロジェクトの強度が増すものと思われた。

それは，プロジェクトそのものがアートであり，そのバックボーンをささえる哲学は，子どもを中心に考えられた非常に現象学的な方法から発想されていると感じました。

短大・大学教員/一般

子どもたちの活動のコンテクストをイメージ豊かに掴み，掘り下げ，育んでおられるご様子が素晴らしかったです。
貴重なご講演と討議をありがとうございました。「工事」は，関心の芽をいろいろな方向から指摘するテーマで興味深かったです。
「理論」と「実践」のミッシングリンクについて，共感しました。
私は，教育人間学からのアプローチなので，「理論」の側かもしれませんが，もっと美術やものづくりの現場に入る機会があれば，とても有り難いです。
また様々な研究分野や領域のわざ集う研究会，実践の機会を今後ともよろしくお願いいたします。

大学教員

・よく準備され，すばらしい運営だったと思います。
・ウアラス教授はじめ，各先生方のご意見は非常に参考になりました。ウアラス教授は他の分野との融合(?)（生物学や数学等）のお話をされていらっしゃいましたが，興味を持ちました。

短大教員/絵画教室主宰

大変示唆に富むフォーラムでした。
ウアラス先生の“情熱”という人が育てる者の基本姿勢から改めて自分に問うことができました。
ありがとうございました。

短大教員

ウアラス先生のプロジェクト型美術教育のすばらしさを実感しました。
日本でも，子ども達の想像力を育てる教育がなされていくことを願います。

行政担当者

①，近年，欧米はもとより日本，中国に至るまで創造性がまちや地域社会，経済活動にまでプラスの影響を及ぼし好循環をもたらすことが実証されてきました。（→創造都市論や創造産業論など文化経済学の観点。）
②，本日のマリオ・ウアラス先生のお話からは芸術創造のプロセスやその行為が人生の形成能力を高めることに大きく寄与するものであることをうかがわせていただきました。

①と②の両局面を考えあわせますと，美術科教育にこそ，かけがえのない潜在力と可能性が秘められていることを強く感じます。
本日は貴重な機会にあずからせていただきありがとうございました。

大学教員

・普段は決して結びつかない「子ども」と「工事現場」であるが，工事現場の可能性，多様性，非日常性と子どもの特徴的な世界との共通点を見い出し，アート教育につなげたことが，とてもおもしろく感じた。子どもにとっても，自然なかたちで意欲的に取り組めたアートプロジェクトだと思う。
・このアートプロジェクトが魅力的になっているのは，やはり指導者が芸術の知識を持ち，子どもの活動につなげていく力が必要であると思った。
・日本の学校教育に結びつけるならば，教師に対しての芸術教育が必要であることをあらためて感じた。

所属不明

芸術教育に対してヨーロッパは日本よりも社会的に理解されていると思っておりましたが，困難は共有されていることも知り，教育の中での他分野への理解が世界レベルで，一層必要だと考えました。
ありがとうございました。

フォーラムの記録を見て考えたこと

佐藤 賢司 （大阪教育大学）

この短い文章を記す前に，まずはこのフォーラムのシンポジストとして指名されながら，大学業務のため当日の議論に参加できなかったことを，お詫びします。

さて，当日の議論の感想ということですが，実にさまざまな切り口があり，とても一言では言えませんが，自分自身の関心と重なる二つの点に触れてみたいと思います。

当日配布のペーパーにも書きましたが，美術教育を語る際に，行為者の中に生成される思考，その連続性や変化については，実のところさほど深くは触れられていないのでは…という疑問がありました。「造形遊び」についても，一見行為性を軸に語っているように見えて，最終的な「獲得する知（なるもの）」を暗黙のゴールとして語られる場合も少なくないように思えます。

その点で，ウアラス氏がプロジェクトにおいて，「芸術的思考と行為」の重要な要素として「子どもたちの直接的な知覚認識」「批判的なリフレクション」「想像力」「文脈性」「変容」といったものを挙げていることは，それら要素が目的的性格ではなく，「そこで起きること」であることから，強く共感します。

また，「揺れ動くこと」ということをあえて示すことの誠実さも，私たちにとって非常に重要な示唆だと思います。例えば「誘導された学習と自己責任の学習」の間を揺れ動くというのは，アートプロジェクトに限ったことではありません。美術教育では子どもの主体性を前面に語ろうとするがゆえに，その学習環境や題材が，他者（＝教師）が考えた目的のために用意されている…という事実にあえて触れることをしません。しかし，「学習目標」を子ども主格で記述してもそれを決定するのは教師であり，特に小学校では「めあて」なるものは，子どもの外からやってきます。

教室の外に展開するアートプロジェクトの場合（造形遊びにおける「場所」の場合）でも，無個性の造形材料や均質な区間ではなく，すでに何らかの社会的意味が付与されたものが，選択されて提供される点において，ある種の方向付けはされていると言えるのかもしれません。それでもなおそこに子どもの主体的な学びが実現されること，そのことの意味こそ，私たちが考えるべきことなのだろうと思います。

このように考えると，「誘導された学習と自己責任の学習」の間の揺れは，きわめて根源的な学習論・授業論の問題として捉えられます。

もう一つ注目したのは，「芸術の理解」ということです（湯川氏の質問にも関連すると思います）。

プロジェクト画像を見た素朴な感想として，子どもたちの作品（と言ってよいのか）の数々が，私たちの目には「芸術的」に映るという点があります。もしも似通ったプロジェクトを日本で実践したならば，どのような状況が出現するかを想像すると，その差が実感できるのではないでしょうか。

もちろん，その理由を限定的に求めることには限界があり，おそらく想像の域を出ません。指導者の意図や学習者のレディネス，プロジェクト実施過程での様々な非言語的メッセージや，言葉の行間といったものが重層的に影響しているはずです。その中でも，描き・つくり・考えることの社会的な位置づけと理解は，おそらく大きな影響力をもっていると思います。湯川氏の質問とウアラス氏の回答はこの問題を改めて考える機会となりました。

改めて当日参加できなかったことを残念に思います。重要な問題を考える機会を下さった，企画の宇田秀士先生，マリオ・ウアラス氏，登壇者の方々に感謝したいと思います。

おわりに

『2016 年度 美術科教育学会リサーチフォーラム in Osaka, Japan 2016.7.30 記録集』 刊行作業を終えて

記録的な猛暑の中，2016 年7月 30 日(土)午後に行われた「リサーチフォーラム in Osaka, Japan」も，開催から５ヶ月が経ちました。今回のフォーラムの一連の流れを振り返り，まとめの記としたいと思います。

フォーラムの中核に据えた講演のドイツ・ハイデルベルク教育大学のマリオ・ウアラス(Mario Urlaß)氏は，2007年７月の「InSEA欧州地区会議 inハイデルベルク」に参加された福本謹一氏(兵庫教育大学)がスカウトし，「第32回InSEA国際美術教育学会 世界大会2008 in大阪」で宇田がコーディネーターを務めたセミナーに招待しました。 http://www.art.hyogo-u.ac.jp/fukumo/InSEAinJapan/photoinsea/PhotoGallery.html

氏は最終的にはライプティヒ大学で学ばれ，現大学では芸術及び芸術教授学を担当されています。中心的な研究テーマは「基礎学校(小学校)における芸術的人間形成」「自然と関わる芸術教育学」であり，「現代芸術，絵画・オブジェ・インスタレーションの領域での芸術的活動」も行っています。http://www.mario-urlass.de/
2010年に宇田がハイデルベルクを訪問するなどの交流を続け，今回は兵教育大学副学長となられた福本氏の尽力により同大学国際交流協定による招待で来日が実現しました。また，美術科教育学会事業部の支援も得て，会場費，講演者・ドイツ語通訳者謝金などに充てさせていただきました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

実施日をマリオ・ウアラス教授の日本滞在日程(7.24-8.3)にあわせて設定したため，ちょうど，現職教員向けの夏の研修・研究会日程と重なりました。このため，参加者は65名に留まりましたが，関西地方のほか，埼玉，東京，群馬，富山，徳島，岡山，大分など全国からお集まりいただきました。また韓国からの参加者も２名おられ，名実ともに国際的なフォーラムとなりました。
さらに，「プロジェクト型の活動」というテーマを掲げて広報したこともあってか，参加者の中には，市役所や公的機関で地域活性や国際交流に携わる方，文化研究者，美術館学芸員，地域のアート教室主宰の方など学校教育以外の幅広い参加者がありました。

永守 基樹前代表理事(和歌山大学)の挨拶の後，宇田が，当日配布『概要集』全55頁を基に，企画の趣旨・登壇者紹介・進行説明の後，「2008 InSEAでのウアラス氏のロフト・プロジェクトの事例と日本の「造形遊び」との比較」を約20分間報告しました。氏のプロジェクト実践は次のURLから見ることができます。
https://www.ph-heidelberg.de/kunst/personen/hauptamtlich-lehrende/biographie-prof-mario-urlass/urlass-downloads.html

その後，ウアラス氏による講演「ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」の可能性について–「工事現場」プロジェクト」がありました。松坂千也子氏によるドイツ語逐次通訳を随時入れましたので，約70分間(13:25-14:35)の講演でした。
ウアラス氏は大学で教える傍ら，昨年9月から毎週月曜日午後，ハイデルベルク近郊のヴィースロッホのメリアン基礎学校１年クラスを教えています。そして，本年5月に開始した「工事現場」プロジェクトでは，22人

のクラスに90分の授業を毎回行ってきました。

その目的は，「独自性と自己構築能力を持つ子どもを中心に据えた芸術志向であるドイツの教授法理論」を学校での現実の授業で実現することでした。氏がこれまでのプロジェクトも含めて長年行ってきたことは，小学校における芸術教育の理念が持つ可能性と限界を探ることで，子どもたちの感性の鋭敏化，批判的な省察，想像力，文脈性，変容，などを重視してきました。

また，「誘導された学習–自己責任の学習」「開放–統制」「真実–想像」「緩やかな思考–厳格な思考」などの軸での「振幅」を大切にしています。すなわち，何れかに偏らずに両方の要素を自然に入れていく方法です。

さらに，プロジェクトの基本的な特徴は，「数カ月にわたり少しずつ発展していくテーマ」「プロセス重視，実践重視の受容・制作，それらの省察」「遊戯的・実験的な学習」「領域横断性」「テーマや子どもに対しての多様な見方」「写真，インスタレーションなど表現方法の多様性」が内包されていることといえます。

これに基づいたプロジェクトでは，子どもの学習と隣り合わせで行われる学校の改築工事に出会い，これをテーマにしました。工事現場を見ながら設計図を想像して描くことから始まり，現場の専門家の説明の場，現場での見学と道具の体験，ジオラマのようなミニ空間の創造，現場の泥を混ぜての描画活動，インスタレーション活動，それらの発表と省察と続きました。

また，各活動の後で，次のような関連する芸術家の作品・活動の鑑賞活動があることも特徴的でした。日本では金沢 21 世紀美術館の常設展示「スイミングプール」で知られるアルゼンチンのレアンドロ・エルリッヒ(Leandro Erlich 1973–)，アンフォルメに触発されたスペインのアントニ・タピエス（Antoni Tàpies 1923–2012），英国のスリンカチュ(Slinkachu)の作品集(北川玲訳『こびとの住む街 1』創元社,2013)などがそれでしたが，実際の子どもの主体的な活動を見ての鑑賞作品の選択が絶妙だったと感じました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

その後，約 35 分間(14：35–15：10)の「質問と対話」を行い，指定質問者の岡田 陽子氏(大阪千代田短期大学・元大阪府小学校長)と辻 大地氏(こどもアートスタジオ)，フロアーの山口 三佐子氏(大阪府豊中市立豊島小学校)から，それぞれ質問がありました。この対話の中で，ドイツでも芸術の本質を追究した授業は必ずしも多くはなく，ウアラス氏は，基礎学校の教師や保護者会でアピールするなどして、それらの現状に対して懸命な努力を続けていることなどが分かりました。

15分間の休憩を挟み，後半の「シンポジウム」(15:25–17:55)を行いました。以下のように，それぞれの立場からの現状認識が語られ，続いてウアラス氏との対話がありました。

・福本 謹一氏(兵庫教育大学)「プロジェクト学習・課題解決学習における美術の分野の可能性から」
・湯川 雅紀氏(関西福祉科学大学)「ドイツの学校教育で実践されている美術の題材やカリキュラムについて –ドイツ・デュッセルドルフでの生活・芸術体験から」
・鈴木 幹雄氏(神戸大学)「芸術教育の「フレクシブルな実践」と教員養成を支えるもの–ドイツ芸術教育学が遺した遺産を再省察する」

「<つくること>と身体の思考」の立場からの対話を予定していた佐藤 賢司氏(大阪教育大学)は，重要会議のため終了間際の到着となったため，本記録集に感想を寄せていただきました。

また，フロアーからは，宮崎 浩氏(西宮市仁川学院小学校)，森 芳功氏(徳島県立近代美術館)，羽太 広海氏(奈良学園大学)から，それぞれ質問があり，それを基にした対話が行われました。

これらシンポジストやフロアーとの対話を通じて次のようなことを感じました。

1，芸術大国とも言えるドイツであるが，理論と実践の間には，やはりミッシングリンク(Missing-link失われた環/鎖)があり，この接続をしようとするウアラス氏の奮闘

2，ドイツは連邦制であり，中央集権的な我が国のように一概には言えないが，日本で言う総合的な学習の伝統があり，選択科目である「分科学習Differenzierungskurse」では教科や領域を横断した学びがあり，これに芸術活動も絡んでいること

3，「社会彫刻(Soziale Plastik)」「誰でも芸術家である Jeder Mensch ist ein Kuenstler」などのヨーゼフ・ボイス(Joseph Beuys 独 1921-1986)の主張や「生きる術としての芸術 Lebenskunst」がウアラス実践に大きな刺激を与えていること

言葉の壁もあり，運営は決して容易くはなかったのですが，発言者それぞれの今後の実践に向けての必死な姿が見てとれ，励まされました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

また，当日のテープ起こし記録を何度か読みかえすうちに，芸術活動の可能性を信じるウアラス氏の教育実践の全体像が見え出してきました。フォーラム開催前の７月26日(火)に奈良教育大学学生に対して，特別授業「55Centプロジェクト 日本版」もしていただいたことも，その一助となりました。前日に一緒に「100円Shop」に行ってネタを仕入れ，学生とともに創造活動を味わいました。(同様の内容は、兵庫教育大学でも実施されました。) 「美術教育における「あそび」概念の整理・構築」が私の現在の研究テーマですが，フォーラムで吸収した内容をふまえ，今後の研究・教育に繋げたいと考えています。

今回，講演者，発言者のお手を煩わせ，今後のための貴重な記録資料を作成することができました。関係の皆様に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また今後もこうした様々な立場からの発言者が集う議論の場を設けていきたいと考えています。どうぞ，宜しくお願い致します。

コーディネーター　国立大学法人 奈良教育大学 美術教育講座

教授　宇田 秀士（うだ ひでし）

平成 28(2016)年 12 月 30 日

○2016年度 美術科教育学会 リサーチフォーラム in Osaka, Japan2016.7.30 は，以下の支援を得て開催しました。
・美術科教育学会　事業部　活動費
・兵庫教育大学　国際交流協定基金
・日本学術振興会 2014-2016 科学研究費補助金 基盤研究(c) No.JP26381201 ＜美術教育における「あそび」概念の整理・構築＞に基づく題材並びに授業モデル開発 (代表 宇田 秀士)

○事前準備及び当日運営は，以下のスタッフで行いました。
・会場手配　佐藤賢司氏（大阪教育大学）
・ドイツ語通訳　松坂千也子氏
・学生スタッフ
清家 颯　　（大阪教育大学大学院１年生）
關 瑞季　　（奈良教育大学４年生）
中垣 あかね（奈良教育大学４年生）
中西 恵里奈（奈良教育大学４年生）
柴田 瑶子　（奈良教育大学４年生）

○本記録集刊行にあたっては，左記科学研究費補助金 基盤研究(c) No.JP26381201 の支援を受けました。
https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-26381201/

○英文校閲・作成の一部においては，日本開発サービス社 翻訳・印刷部の協力を得ました。
http://jds21.com/

○リサーチフォーラム記録作成のためのテープ起こしにあたっては，株式会社かえでプロダクション テープリライト部門(関西テープリライト)の協力を得て行いました。 http://kaede-pro.com/rewrite/

○『美術科教育学会通信』No.93(2016.10) 10-11 頁にリサーチフォーラム in Osaka, Japanの報告を掲載しています。
http://www.artedu.jp/tusin/?action=common_download_main&upload_id=511

○WEB版記録集とは別に『記録集』冊子(明新社 http://www.meishin.co.jp)を刊行しました。

2016 年度 美術科教育学会 リサーチフォーラム in Osaka, Japan　2016.7.30 記録集 Web 版
ドイツの初等教育における「アート・プロジェクト教育実践」から探る美術教育の新たな<かたち>
マリオ・ウアラス教授(ドイツ・ハイデルベルク教育大学)のプロジェクト型美術教育をふまえて–

平成 28(2016)年 12 月 30 日公開
編集発行　国立大学法人 奈良教育大学 美術科教育研究室 宇田秀士

〒630-8528 奈良市 高畑町（たかばたけちょう）

電話･FAX　0742-27-9223（宇田研究室直通）